



今この苦によりそう

りゅうこくブックス
138

龍谷大学宗教部

今この苦によりそう

龍谷大学「建学の精神」

龍谷大学の「建学の精神」は「浄土真宗の精神」です。

浄土真宗の精神とは、生きとし生けるもの全てを、迷いから悟りへ転換させたいという阿弥陀仏の誓願に他なりません。

迷いとは、自己中心的な見方によって、真実を知らずに自ら苦しみをつくり出しているあり方です。悟りとは自己中心性を離れ、ありのままのすがたをありのままに見ることのできる真実の安らぎのあり方です。

阿弥陀仏の願いに照らされ、自らの自己中心性が顕わにされることにおいて、初めて自己の思想・観点・価値観等を絶対視する硬直した視点から解放され、広く柔らかな視野を獲得することができるのです。

本学は、阿弥陀仏の願いに生かされ、真実の道を歩まれた親鸞聖人の生き方に学び、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間を育成します。このことを実現できる心として以下5項目にまとめています。これらはみな、建学の精神あってこそのものであり、生き方です。

すべてのいのちを大切にする「平等」の心

真実を求め真実に生きる「自立」の心

常にわが身をかえりみる「内省」の心

生かされていることへの「感謝」の心

人類の対話と共存を願う「平和」の心

目次

コロナ禍の中で

福岡義朝 5

ブツダは人工妊娠中絶を責めるか

大谷由香 41

杉岡先生を偲ぶ

高田文英 75

中学生・高校生と仏教を学ぶ中で教えられたこと

～私の立脚地は何処か・共に苦悩し、問う～

近藤義行 89

仏教から結婚式の意味を問い直す

～結婚式はもっと自由でいい～

田坂亜紀子 111

仏教から読み解くアンパンマン

～浄土真宗の視点を中心に～

四夷法顕 129

多様性の中で生きる

鷺尾龍華 151

龍谷大学宗教部は、大学内外からお招きした講師の講話・講演を活字化し、「建学の精神」を普及し体現するために『りゅうこくブックス』を刊行しております。

宗教部主催の法要・講演会には以下のようなものがあります。

- ・授業期間中 毎月十五日 深草学舎 顕真館にて お逮夜法要
- ・授業期間中 毎月十六日 大宮学舎 本館にて ご命日法要
- ・授業期間中 毎月二十一日 瀬田学舎 樹心館にて ご生誕法要
- ・毎期一回水曜日 顕真アワー
- ・五月二十一日 降誕会
- ・十月十八日 報恩講
- ・公開講演会 など

ブックスを講読していただくとともに、可能であれば各会場にもおまいりくださいませ。

二〇二三年十月十八日 報恩講法要 瀬田学舎

コロナ禍の中で

福間義朝

（中央仏教学院 学院長）



福間 義朝（ふくま ぎちょう）

1951年、広島県三原市教専寺に生まれる。

岡山大学法文学部法学科卒業。

20代でRSK山陽放送でDJを勤める。

住職、布教使として法務を勤めながら、本願寺派住職過程専任講師・伝道院布教研究課程専任講師などを歴任し、2023年に中央仏教学院学院長に就任し現在に至る。

【著作】

『赤光 寺からの便り』（探究社／2014年）

『心に響くことば 法語カレンダー二〇二一年（令和三年）法語解説』
（本願寺出版／2020年）

『赤光 2』（探究社／2022年）

『赤光 3』（探究社／2022年）

他法話冊子・記事など多数。

讃題

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし
攝取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる

〔浄土和讃〕／〔浄土真宗聖典―註釈版―〕五七一頁

こんにちは。今日は『コロナ禍の中で』という講題でお話しをさせていただきます。

もう皆さんはコロナ禍にも慣れてきたんじゃないですか？

私の周りの人はほとんどが一度はコロナにかかりました。「コロナにかかった」と聞いても驚かなくなりましたね。でも、実は私はまだコロナにかかってないんです。

一度、静岡で仕事関係の飲み会があって、その翌日に電話がかかってきました。「先生、大丈夫ですか？」って言うんですね。どうやら、その会に参加した人がみんなコロナにかかってしまったらしいんです。なぜか私だけがからなかったんですよ。それを言ったら教え子が、「きっとコロナにもプライドがあるんじゃないですか」って言うんです。コロナウイルスにも「この人だけは感染したくない」ってことがあったのかもしれないですね。

パンデミックの歴史

実は、私たち人間の先祖は何度もパンデミックを経験してきました。

百年前にはスペイン風邪がやりました。スペインという名前が付いていますけれど、スペインだけの風邪ではないんですよ。当時は第一次世界大戦中でしたから各国が情報統制をしていました。本当は流行していたんだけど、正直に言わなかった。でもスペインは中立国でしたからね。流行していることを正直に発表しました。そうしたら「スペイン」という名前が付けられてしまったんです。このスペイン風邪の死者数は五千万人とか一億人とか諸説があります。戦争中ですからね。本当の情報がないんです。

日本は、当時の人口が約七五〇〇万人くらいでした。今より随分少ないですね。その人口の内、二三〇〇万人が感染しました。そして、たった二年間で約四〇〇万人が亡くなられたんです。コロナで亡くなった方が七万人くらいですから、すごい数です。

明治時代にはコレラがやりました。あの頃はコレラをコロリと言っていました。「三日コロリ」と言って、感染したら数日でコロリと逝ってしまうからです。非常に残酷な名前ですね。た

くさんの人が亡くなりましたが、特に明治十二年には十万人以上が亡くなりました。

その当時、私の寺の住職は私の曾祖父でした。その住職がコレラ流行中に何と言ったかと言うと「急いで寺へ参れ」と言って歩いたんですよ。「死ぬ前に、死んでからの往き先をちゃんと聞いておけよ」ということです。それを聞いていっぱい参ってきたらしいですよ。日頃はお寺に参詣しない人まで参ってきたという記録が残っています。

一方で、ひ孫の私はコロナ禍で何度か法座を中止してしまいましたね。曾祖父が聞いたら泣くだろうなとは思いましたが、コロナ禍の雰囲気的には中止せざるを得なかったんです。

親鸞聖人の時代

さて、問題は親鸞さまの時代です。

昨年、NHKの大河ドラマの『鎌倉殿の十三人』が放送されました。皆さんは見られましたか。私はずっと熱心に見ていましたよ。なぜそんなに熱心に見ていたかと言うと、時代背景が親鸞さまご在世の時代なんですよ。あのドラマを見ながら、「この時、親鸞聖人はどうしておられたかな」

と思いをさせていました。

はじめの方に、「比企能員の変」(一二〇三年)というのがありました。あれは、親鸞聖人が法然聖人にお会いすることができた「建仁辛酉の暦」(一二〇一)の頃の出来事です。

「しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」

〔教行信証〕化巻／『浄土真宗聖典―註釈版―』四七二頁

ドラマを見ながら、「この頃に親鸞さまは法然さまに会われたんだな」とか、「この頃はもう越後に居られるのかな」とか想像していました。このドラマの終わり頃には親鸞さまはもう関東に出ていらっしやいました。私がもし三谷幸喜さんと親しかったら、「ちよつとも良いから、あのドラマに親鸞さまを出してくださいよ」ってお願いしたんですけどね。運慶さんは出ていましたからね。

親鸞さまは一一七三年にお生まれになりました。その頃は「平家にあらずんば人にあらず」とまで言われたような、平家の全盛期でした。その頃の親鸞さまの立場はどのような立場であっ

たか。実は、親鸞さまは自分のことは一切語っておられません。親はどういう人かとか、兄弟姉妹が何人いたとか、比叡山で何をしたらとか、越後はこうだったとか、親鸞さまご自身が書かれたような記録がありません。これには意味があるんですけれどね。ですから、諸説あるんですが、伝わっていることによると、お母様は吉光女という源氏のお方だったようです。吉光女は八幡太郎義家（源義家）の孫という説もあれば、為朝の娘説もあります。また頼朝とはいとこ同士のじゃないかという説もあります。とにかく、お母さんが源氏の出身ということであれば、平家全盛の時代には親鸞さまの立場は良いものではなかったでしょう。僧侶に成らざるを得なかったのかもかもしれませんね。

源氏の頭領だった頼朝は、伊豆に流されて監視付きの身になりましたね。流罪人だから、北条も伊東も全部監視しているんです。居心地が悪かったと思いますよ。ずっと見られてるんだからそして、頼朝の弟たちは、みんなお坊さんに成っています。こちらは監視が付かなかったけれど、出家させられたんです。阿野全成あのだんじょうですとかね。義経も鞍馬山に預けられて出家させられるところを逃げ出しているだけなんです。

源氏の親族として親鸞聖人も出家して僧侶にならざるを得ない状況だったのでしょうか。親鸞さ

まのご兄弟も全て出家して僧侶になっています。非常に厳しいことですね。親鸞さまには居場所
がなかったということです。

ところが、平家だった世の中が、今度は源氏の世の中に成りました。昔、日本史で「良い国
つくろう鎌倉幕府」って覚えたでしょう。一一九二年、親鸞聖人は数え年で二〇歳です。今は
一一八五年に鎌倉幕府が樹立されたことになっていますけどね。そこから親鸞さまは約七〇年間、
鎌倉時代を生きられました。

疫病と飢饉の時代

鎌倉時代は北条高時ほうじょうたかとときが新田義貞にったよしさだに鎌倉で攻め滅ぼされるまで一五〇年間続きます。その間で
なんと五〇回も元号が変わっているんです。単純に計算すると三年に一回変わっていることにな
りますね。なぜそんなに頻繁に元号を変えるのかというと、当時は天変地異が起ったり疫病が
はやりたりすると元号を変えていたからなんです。今がもし鎌倉時代ならもう令和じゃなくなっ
ていると思いますよ。きっと変えられているんじゃないですか。

そして、その五〇回の内、十一回は疫病で変わっています。

その疫病は、今で言う天然痘です。いっぱい亡くなったんですよ。ドラマでも実朝が天然痘にかかっていましたが、天然痘というのは高熱が出て亡くなるんですね。

鎌倉市の由比ヶ浜で鎌倉時代の墓からいっぱいお骨が出てきました。その中の二六〇体を聖マリアンナ医科大学の平田和明先生という方が分析して年齢を調べたんです。そうすると三分の一は十五歳以下、五十五歳以上はわずか五人しか居ませんでした。それで平均寿命を計算すると、なんと二十四歳なんです。そういう時代に、親鸞さまは九〇歳まで生きられたんです。

しかも親鸞さまが五十九歳の時、寛喜三年には有名な「寛喜の大飢饉」という飢饉がありました。本当にすごい飢饉だったようです。寛喜二年には、真夏の七月に雪が降り、十一月には桜が咲き、十二月には蝉が鳴いたと記録されています。こんな具合でしたから当然ですが米はできません。食糧難になり「天下の人種三分の一失す」、つまり、人口が三分の一になったんだそうです。たくさんの方が地に倒れて、まさに死屍累々として亡くなっていったんです。

そういう時代を親鸞さまは生きておられたんです。

迷信の時代

そして皆さんご存じでしょうかね。鎌倉時代って、実は電気が通ってなかったんですよ。

そんな時代に雷が鳴ったらなんだと思ったでしょうか。当然、「あれは電気だ」とは思いません。当時の人々は、「天の神が怒っている!」と思ったんです。雷神ですね。だからすごくおびえたんです。

平安時代に宮中の清涼殿せいりょうでんという所に雷が落ちたことがありました。死者も出て、大変な騒ぎでした。その当時の人々がたよりにしていたのは陰陽師です。陰陽師は国直属の国家公務員でしたから、今で言うなら文部科学省の役人で、さらにエリートの科学者みたいなものでした。その陰陽師に、「なぜ、雷が落ちたのか?」と聞くわけです。そうしたら、陰陽師が「菅原道真すがわらのみちざねの怨霊である!」と答える。それを聞いて、みんな、思い当たることがあるんです。道真をいじめていましたからね。だから、陰陽師に「どうしたらいいのか」と聞いたんです。そうすると、陰陽師が「天満宮を立てなさい」と言いました。そういう時代だったんです。

雷だけじゃなくて、台風だってあの頃は何が何だか分かりませんでした。そもそも地球が丸いこ

とも知らないし、気圧もヘクトパスカルも、そんな概念自体がありません。台風も雷と同じように神の怒りとしか考えられなかったんです。風神ですね。だから風がビューと吹いたら、神が怒っているとおびえました。

そういう災難があつた時、仏教界はどうしていたのかと言えば、ひたすら災難を収めるために読経をしていたんです。

元寇^{げんこう}で元（モンゴル帝国）が攻めて来たときもそうです。武士は全員九州に行つて戦いましたが、お坊さんは全国の寺院で国を護るために読経したんです。お坊さんの仕事は読経の力で災いを避けることだったんですね。当時はそれが当たり前だったんです。

疫病だつてそうですよ。ウイルスなんて当時の人たちは知りません。疫病になるのは疫病の神が来るからだと思つていたんです。平安時代の絵巻物を見たら疫病の神の絵が描いてあります。怖い顔をして屋根から覗き込んでいる絵です。そんな神がいたら「うちへは来ないでくれ！」つて思いますよ。これが当時の常識なんです。疫病^{えきびよう}の神と書いて「やくびょうがみ」と読みます。今でも疫病神という言葉は使われていますね。

でも、親鸞さまは、そういう迷信をハッキリと否定して、「違う」と言われたんです。天神地

祇に敬服するようなのは仏教じゃないと嘆かれました。あの時代にそういうことを言うということとはすごいことなんです。

もちろん、親鸞さまは科学の立場から迷信を否定されたんじゃないですよ。仏法の立場から否定されたんです。「仏法というのは災いを避けるための教えではない」と、ハッキリと示されたのが親鸞さまなんです。

仏教のスタート地点

仏教の根本はお釈迦さまです。

お釈迦さまがご出家された二十九歳の頃、お釈迦さまはどんな境遇だったのでしょうか。みなさん、ちょっと思い出してみてください。

地位は王子さま。次期国王です。もちろん、財も持っていました。当時のインドは最先進国でしたからね。富は先進国に集まるものですから、宝の山を持つておられたんです。住んでおられた家は、豪邸どころではなく宮殿です。しかも一つではなく三つも持つておられました。冬、夏、

雨季の三時の宮殿を季節ごとに移動して生活しておられたんです。

家庭も充実していました。美しいヤショーダラーというお妃さまがいて、ラーフラという跡取り息子にも恵まれました。お釈迦さまは良き夫であり良きパパだったんです。

健康面もすごいですよ。二五〇〇年前に八〇歳まで生きられたんですから、強靱なお身体を持っておられました。二五〇〇年前の日本の平均寿命は何歳だったと思いますか。日本では縄文時代から弥生時代で、稲作が始まったくらいの時期です。あの頃の日本の平均寿命は、なんと十五歳くらいです。当然、病院なんてありませんから簡単なことで亡くなるのが当たり前だったんです。当時のインドは日本よりは平均寿命が長かったでしょうが、それでも八〇歳というのはすごいことです。

ちなみに皆さん、日本の平均寿命が五〇歳を超えたのはいつだと思われますか。実は昭和二十二年（一九四七年）なんです。ちょっと前のことですね。明治時代の平均寿命は四〇代でした。今は随分と伸びて、うちのお寺のご門徒さんは九〇代が普通です。八〇代で亡くなったら「あら、どうしたの？」って言われるくらいです。

四〇年前、うちの近くのおじいさんが一〇〇歳を超えたんです。当時はごく話題になって、

テレビのニュースに出ました。広島県知事も表彰にきました。一〇〇歳に成ると国が銀杯をくれるんです。もらった銀杯を見せてもらいましたよ。本当に純銀でできていますから持つと重さがズンと来ます。今、うちのご門徒さんでも一〇〇歳超えて銀杯もらっている方がおられますけど、今の銀杯はメッキです。持っても「軽っ！」って感じです。つまり、今は銀杯をもらう一〇〇歳以上の人が増えたということです。

お釈迦さまが二五〇〇年前のインドで八〇歳まで生きられたというのは、今と違ってすごいということなんです。

お釈迦さまは、地位・財産・健康と何をとっても申し分なかった。勝ち組中の勝ち組だったんです。

でも、お釈迦さまはご出家の時に、それらを全部捨てられましたね。なぜ捨てられたのでしょうか。実はこれが仏教のスタート地点なんです。

このお釈迦さまが捨てられた地位や財を、一生をかけてゲットした人が日本にはいます。誰かわかりますか。豊臣秀吉とよとみひでよしなんです。

秀吉は関白太政大臣にまでなりましたから地位も財も持っていました。秀吉は金きんが大好きだっ

たそうで、大阪城に金の茶室を作ったとか、伏見城の屋根も金だったという説があります。家庭については、長く子に恵まれませんでしたでしたが最後には秀頼ひでよが生まれましたね。健康面で言えば六十三歳まで生きたので、戦国時代にしてはなかなかすごいですよ。秀吉は、一生をかけて全てをゲットして、ついに勝ち組になったんです。

それなのに、秀吉は最後に苦しむじゃないですか。なんで苦しむのか分かりますか。秀吉がゲットしたものは、最期には全部失うものだったんです。そして、有れば有ったで苦しむものなんです。結局、秀吉は何かがおかしくなってしまうたんでしょうね。邪魔になるからと、甥の秀次ひでつぐとその関係者を皆殺しにしました。

最期には「露つゆと落ち 露と消えにし我が身かな 浪速なにわのことは 夢のまた夢」という辞世の句を詠んで、秀吉はむなしく人生を終わっていったんです。

秀吉が最期に行き着いたところが、仏教のスタート地点です。

生れ・財産・健康、そういうものを当てにしないのが仏法なんです。地位がなくても財がなくても、一人であっても病であっても大丈夫なんだ、というのが、お釈迦さまが示してくださったお悟りの世界です。

ハッキリと言っておきますが、この命が一番じゃないんですよ。もし、今生きているということが一番なら、死んだら全部終わりでしょう。この命より大切なものを聞くのが仏法です。そして、それを日本で示されたのが親鸞さまです。南無阿弥陀仏のみ教えなんです。

なぜ今日こういう話をするかというと、コロナ禍中によくされた質問があるんです。築地本願寺で法話した時の質疑応答で「他の宗派のお寺はコロナ退散とか、みんなの役に立つことや、みんなが喜ぶことをしているのに、なんで浄土真宗ではしないんですか」と何度も聞かれました。でも浄土真宗は、そういうことはやりません。なぜか分かりますか。浄土真宗は仏教だからです。仏教を掲げているのに疫病退散ということをするのは絶対におかしいんです。疫病神を追い払うのは仏教のすることじゃありません。

「死」を見つめるインド

お釈迦さまはインドのお生まれです。

私は今までに七回インドに行ったことがあります。インドは何回行っても飽きないですね。す

ごい所だなと思います。

去年の十月に築地本願寺のイベントで、有名な写真家の三井昌志みついましさんと対談をしたんですよ。この方は二〇年くらいバイクでインドを回って写真を撮っている方です。面白い写真を撮られています。

彼は「観光というのは、本来は光を観るって事で、本当の観光というのは人間を撮るということ」と言っていました。観光地という場所を撮るんじゃなくて、その人の中の光を写すのが本当の観光なのだと思います。

三井さんは「インドには、日本では全く意味が分からないようなことをされている人がいっぱい居る」と言うんですね。体を粉で真っ白にして素っ裸でずっと座っている人とか、ただひたすら右腕を上げ続けている人とか、日本の価値観からすると全然意味がないことをしていますよね。もし同じことを日本でしていたら「何をしているんだ？」となるでしょう。でも、そういう人がインドでは普通に許されて存在しているんです。三井さんは「その豊かさが羨ましい」と言うんです。一方で、日本は有益じゃなかったら排除されるでしょ。日本はインドのようなゆとりがないんですよ。ギスギスしている。インドには、そういう意味がわからないようなものでも受け入れるゆとりの雰囲気があるんです。

私が初めてインドに行ったのは四十年前のことでした。その時は、ブッタガヤとか靈鷲山りょうじゅせんとかに行ってもインドの人は誰もいませんでした。なぜなら、インドは仏教国じゃないからなんです。インドはヒンズー教の国ですね。ですから、私たちにしたら聖地でも、現地の人たちからしたら「この人たちは、何でわざわざこんな所に来るんだろう？」という感じなんです。そんな具合ですから、会うのは日本人ばかりでした。インドまで行ったのに、知り合いの近所のお坊さんと会ったりしてね。ガックリしました。直近では六年前に行きました。実は来年も行く予定をしています。

今は当時と比べると観光の人が多くなりました。アジアが豊かになりましたから。特に中国の方が多いです。他にも、韓国、台湾、タイが多いです。あとはスリランカやミャンマーの方も居ました。

六年前は伝道院の教え子さん達とインドに行ったんです。十五人くらいで行きましたが、ものすごく目立つんですね。日本のお坊さんは法衣が黒でしょう。それを見て、他の国のお坊さんがビックリするんですよ。大体、法衣というのは黄色なんです。タイとかスリランカの方も黄色の法衣を来ておられますよね。中国は茶色も多いんです。韓国と台湾は灰色もありますね。

真っ黒というのはイスラム教とかキリスト教のイメージが強いみたいです。ですから、ものすごく珍しがられます。いろんな国の人にスマホで写真を撮られました。そうやって写真を撮られるから、みんな意識してしまっただけ。変に微笑んだりしちゃってるから気持ち悪いなど思ったのを覚えています。

そこに居る人たちは、言葉は通じませんが同じ仏教徒ですから、会うとホッとします。お互いに手を合わせて合掌しちゃうとかね。笑顔になれます。道で他のお坊さんの集団と一緒にいると、お互いに道を譲り合ったり、エレベーターを譲り合ったり。先に乗ったらオープンを押していてくれたりして、仏教の聖地は本当に平和だなと思います。

でも、同じ聖地でもエルサレムはこの度いろいろありました。イスラム教とキリスト教とユダヤ教の三つの宗教の聖地ですから複雑で危険なんです。

お釈迦さまは、十二月八日にブツダガヤの菩提樹ぼだいじゅの下で悟りを開きました。その菩提樹の木が聖地の中心です。お釈迦さまはその悟りの内容を四十五年間にわたって説かれたんです。

昔行った時には、その菩提樹のそばに座って記念写真を撮れたんですけど、今はもう近づけな

くなっています。菩提樹の葉っぱも昔は拾って持って帰れたんです。今は禁止です。それなのに、周りの土産物屋には葉っぱがいっぱい売っているんですよ。禁止なのに不思議ですよ。

お釈迦さまはお悟りを開き目的を果たしたので、正覚を得られたその日にこの世界を去ろうとされました。入滅しようとなされたんです。すると、梵天ぼんてん（ブラフマン）というインドの神様がやってきて、お釈迦さまに頭を下げて「どうか、その悟りを説いてください」ってお願いするんです。でも、お釈迦さまは「衆生は、愛欲と怒りで走り回っていて、悟りの教えなんてものはさらさら聞く気がない」とお断りされるんです。それでも梵天が「いやいや、もしかしたら、一人でも聞いて悟る人がいるかもしれません。どうかお願いします」と頼み込むんですね。この話は有名な梵天勸請ぼんてんかんじょうという説話です。梵天に三回懇願されて、やっとお釈迦さまはこの世界にとどまり、人々に仏教を説くことにされました。

この説話は、悟りを言葉にすることがいかに大変なことであるかということを表しています。お釈迦さまは、そんな難しいことを四十五年間されたんですね。

先に話したように、その時のお釈迦さまは既に全部を捨てておられましたから、今で言うところのホームレスでした。何も持たずに、しかも最高の笑顔で、本当の幸せを語られたんです。だ

から伝わっていったんだと思います。リッチな格好じゃ伝わらなかったでしょうね。

お釈迦さまが最初に説法に行かれたのはヴァーラーナシーというところですよ。昔はベナレスと言っていました。ブッダガヤからだと言バスで十時間くらいかかります。そこにサルナート（鹿^{ろく}野^や苑^{おん}）というところがあって、そこでお釈迦さまは最初の説法をされました。

ヴァーラーナシーって面白い町なんですよ。何回も行きました。あそこにはインド中の年寄りが死にに来ているんですよ。死を待つための家があるんです。そこでは集団で生活しています。アパートを借りる人もいて、みんなが死を待っているんです。不思議なことに、死を待っている人はみんな笑顔なんです。亡くなったらちゃんと焼いてくださるんです。そのための薪がいっぱい積まれてあります。

その人に、「ここへ来ててもすぐに死ななくて、ずーっと長生きしてしまったらどうするんですか？」と聞いたら、「また家に帰る人もいる」のだそうです。「死んでくる」って出て行った人が「ただいま」って帰って来たら家の人もちょっと困っちゃうかもね。

「みんな何歳くらいからここに来るんですか？」と聞いたら、大体六十代後半だそうです。インドは平均寿命が六十五歳くらいですから。もし私がインドに住んでいたら、もう行かないとい

けません。亡くならたら焼いてくださいます。お金持ちは白檀の木で焼いてくださるそうです。良いですね。貧乏な方もそれなりの木で焼いてくださるから大丈夫ですよ。

三井さんはご遺体を焼いているすぐそばまで行って写真を撮っておられましたけれど、私はそこまでは近づきませんでした。岸で焼いていて煙がたくさん出ていますから、それを見て「ああ、焼いているなあ」といった感じで見ていました。そして、焼いているすぐそばで洗濯をしていたり、沐浴をしたりしている人もいる。見渡せば、犬もいるし牛もいる、子供も走っています。これがインドの光景です。「そこに全てが有る」という感じがですね。やっぱり、ここから仏教は生まれたんだなと思います。

「死」を隠した日本

一方で、日本は死という光景に蓋をして見えなくしてしまいましたね。最近では宮型の霊柩車を見なくなりました。「縁起でもないからやめてくれ」と、見えないように蓋をされてしまったわけです。コロナ禍になって、余計に死というものに蓋をされてしまった感じがします。

大体、仏教国には死の光景があるものなんです。私が小さい頃は、家で葬式があったらみんな火葬場まで行列を作って行きました。今はやらなくなりましたね。並んで火葬場まで行くのがアジアの仏教圏の光景なんです。今でも台湾には残っています。一度、台湾に行ったとき、ブラズバンドがドンチャカドンチャカ音を鳴らしていて、何のお祭りがはじまるのかと思ったらお葬式なんですね。台湾では火葬場までにぎやかに送るんだそうです。韓国と中国はまた違います。泣き女という人がいるんですよ。泣くプロの人が大声で嗚咽しながら行くんです。今はこの泣き女の方々も失業しつつあると聞きました。あまり呼ばなくなったそうです。

死の光景がなくなってしまったら、今度は、自分が死ぬということが分かんなくなります。死が他人事になってしまっているんですね。そうやって、死が分かんなかったらどうなるかと言えば、今度は生が分かんなくなるんです。生かされていることも分からなくなって、生きている意味さえ失いつつあると思います。

コロナ禍でここ数年、葬式は全部が家族葬になりました。

最期がつかかったという話を良く聞きますよ。家族が一人で亡くなるまで会えなかったって。ずっと一人なんです。見舞いに行っても「一〇分出ていってください」とか言われて、本当

に残酷だったなと思います。

昔はICU（集中治療室）でお別れをしていましたね。うちのお寺の前の前の前の総代長さんが近くの病院のICUで亡くなりました。奥さんから「すぐ来てください。お父さんがもう最期です」と電話があった。お父さんは元気な時から「いよいよになったら寺へ電話してくれ。住職が居たらすぐに来てもらってくれ」と家族に言っていましたからね。だから私は飛んで行っただけです。病院まで運転しながら、さて何を語ろうかと考えました。まずはお礼を言いたかったですよ。「お寺に良くしてくださって、ありがとうございました」って。それとも一つは、お浄土の話をしたかったです。「また会いましょうね」って会って直接言いたかった。そして、なんとか間に合いました。しかし、私くらいの世代は横文字が増えると困りますね。ICUとかPCRとか。去年の初盆の時にあるおばあさんが「オロナインがどうのこうの」と言うもんですから、何の話をしているのかなと思ったらオミクロンのことでした。そういう事が多いです。受付でICUって言葉が出てこなくて「UCCはどこですか」って言っちゃって、玄関の自動販売機まで案内されたりしてね。コロナ禍の前はICUにお子さんもお孫さんもみんな集まって、最後の大切な時間を過ごしていたんですよ。

総代長さんのところに着いたら朦朧としておられました。さあ、いよいよ語りかけようと思いました。でも、私の反対側に若い看護師さんがいて、その方が総代長さんに「頑張ってください！ 頑張ってください！」って一生懸命呼び掛けるんです。「頑張ってください！」って言われてる向かい側で「ありがとうございました」って言いにくいですよ。残念ですが、結局言えないまま、その方は息を引き取られました。そうしたら、さっきまで「頑張ってください！」って言うっていたその看護師さんが、「はい終わりました。速やかに遺体を出してください」って部屋を出られるんですよ。

生きるのは一秒でも長く頑張れと言うのに、亡くなったらパッと手のひらを反してしまう。これはおかしいと思います。

入院する時には表玄関から入って、亡くなったら隠すように裏口から出ていく。本当は、表玄関からみんなが手を合わせて見送るべきじゃないですか。どうも、今の時代は死を隠して生きることばかりに価値を置いてしまうから、おかしくなってしまうように思います。

お骨の問題も深刻です。日本では今、年間一五〇万人くらいの人が亡くなっていますが、その

うちで三〇人に一人はお骨を受け取ってくれる人がいないんです。「家に仏壇がないのでいりません」とか言ってるね。お骨は勝手に捨てたら犯罪になるんですよ。ではどうするかというと、捨てるんじゃないくて新幹線に忘れるんですよ。あえて忘れるんです。だからJRにはいっぱいお骨があるんです。忘れ物扱いでかなりの数のご遺骨がある。捨てられているんです。そういう時代になってしまいました。

ある山口県のお寺で聞いた話ですが、分家として新しく家を起こされた方が亡くなったので、真新しいお墓に納骨しようとしたら、もうお骨が入っていたんだそうです。知らない人のお骨が入っていたんですね。勝手に他人のお墓にお骨を入れて逃げる人がいるということです。今、そういうことをする人が多いんだそうですよ。墓苑をぐるぐる回って「これは立派な墓だな」っていうのを見つけたら、そこにお骨を入れて逃げるんです。だから今はカギをかけるお墓があるんです。おうちのお墓に入っているお骨の数を把握しとかないと「あれ、なんか増えたような気がするな」となるかもしれない。そういう時代です。

こういう風に、死への対し方が全く変わってしまったんですね。本当に大きな問題だなと思います。

我が身は必ず死ぬんですよ。だからこそ、今が本当にありがたい。尊い時であるということが知らされるんです。

何がなくなっても大丈夫

生きる目的は勝ち組になることじゃないんです。今はみんなが勝ち組に成ることを狙っていますね。だから日本は非常に生きづらい。勝ち組だとか負け組だとか言っていじめたり、追いやったりするでしょ。そして、勝ち組は少ないんですから、ほとんどの人が負け組になるわけですよね。

うちのお寺のご門徒の娘さんがブラジルに行かれましたね、ブラジルの方と結婚して日本料理店を出しました。お店は結構順調にいつているようです。

でも、ブラジルは犯罪が多くて刑務所がいっぱいなんです。その娘さんも銃を持った人に「金を出せ」って襲われて、仕方なくお金を出してしまったことがあるんです。フェイスブックでつながっていて知りました。

私も心配だし、娘さんのお母さんも心配されて「早く日本に帰って来い」って言うんですけど、彼女は「日本の方がブラジルより危険だ」と言うんですね。なぜかと聞いたら「日本は自ら命を絶つ人が一年に三万人もいる。でもブラジルでドンパチやっていても何千人も死ぬわけじゃない。だから日本の方が危ない」って言うんですね。日本では、撃ち合いはしなくても、締め付けて鬱にして弱らせてしまうでしょ。そうして自ら命を絶つようなことがあまりにも多い。閉塞感でいっぱいなんです。

今こそ、本当の幸せとは何なのかということを知らないといけないのではないかなと思います。「何がなくなっても大丈夫なんだ」という広い世界をいただかないとやっていけませんよ。

私は若い時にちょっとラジオのDJみたいなことをやっていまして、深夜放送をしていたんです。夜中の二時頃に阪急の西宮近くのアパートに帰るんですが、深夜に一人で部屋に帰るのが嫌だったんですよ。寂しいじゃないですか。

帰る途中、ひらがなで「ゆき」と書いてあるスナックがありました。そのお店は四時まで開いている店でしたから、どんなに遅く歩いていても明りがついていました。でも、入りたいんで

すけど最初は勇気がいるから入れなかった。

だけど三月に広島に帰って住職になることが決まったんで、一月のある日、勇気を持ってその店に入りました。カウンター一つの小さな店で、四十代の和服を着たママさんが切り盛りしていました。

オロオロしながら入ったんですが、驚いたことがありました。カウンターの横の壁に『法語カレンダー』が掛けてあったんです。浄土真宗の教団連合が出している長細いカレンダーです。

びっくりしてね、「これ、どこでもらいました」って聞いたんですよ。そしたらどここのお寺でと答えられて、よくお寺で聴聞するママさんだったんです。嬉しかったですね。

何回かしが行けなかったんですけども、他のお客さんが居る時はワイワイしていましたが、居ないときには「ご法座でこういう話を聞いた」とか、そういう話を飲みながら聞いていました。

そして、「もう、三月に広島に帰るんですよ」と話した時に、ママさんが話してくれた話があるんですよ。

そのママさんは「私は一度死のうと思ったことがある」って言ってね。三〇歳くらいのとき、大阪の難波のお店に勤めていて、そのボーイさんと同棲していたそうです。いずれは結婚しよ

うと二人で貯金して、アパートに住みながら五百万ためたんです。五〇年前に五百万ためたつてすごいことじゃないですか。でも、やっとたまった時に、相手の男が貯金通帳と印鑑を持って逃げたんです。しかも同じ店の女の子と逃げたんですよ。愕然としてしまつて、仕事に行く気にならなれません。夢が崩れて、部屋にこもつてウイスキーをあおつてね。叫んで、泣いて、喚いて、一週間泣き続けて、良いことなんて一つもなかったからもう死のうと思つたんだそうです。そして急に自分の家に帰りたくなつた。ご実家は中部地方の方らしいです。詳しくは言われませんでした。が、高校生の時に家出して、それっきり帰つていなかったのです、最後に親の顔を見ようと思つて帰つたんだそうです。近くの最寄りの駅に降りて、喫茶店に入つて、夕方まで待つてタクシーで乗り付けました。出て行つた時と全く変わつていない、当時のままの家でした。「懐かしかった」と言つていました。玄関から入つたら見知らぬ女性が出てきました。ああ、お兄さんのお嫁さんだなどピンとききました。ママさん自身も、もしかしたら派手な格好で帰つてしまったのかもしれないね、お嫁さんから怪訝な顔をされたそうです。そして「この家の娘で、こういう者です」と名乗ると、女性の顔色がパツと変わつて、奥に引つ込んでいきました。すると奥から男性の声が聞こえてきました。お兄さんの声です。「懐かしいな」と思つて、お兄さんが出てく

るのを待っていました、話し声がやんで誰も出てきません。困ったそうです。

しばらくしたら、お父さんとお母さんが畑仕事から帰ってきました。お父さんは日焼けで真っ黒で、以前より皺が増え、お母さんも白髪が増えていました。二人ともまあびっくりしていました。家出した娘が十何年振りに目の前に立っているんだからね。そしたら次の瞬間、お父さんはぶいと横を向いて納屋に入っていてしまいました。お母さんは困ったような顔をして、勝手口から台所へ上げてくれました。お茶が一杯出されたそうです。

普通だったら、今までのことを根掘り葉掘り聞くでしょう。でも、そんなことは一切聞かれなかった。お母さんからどう言われたかというと「すまんが、すぐ立ち去ってくれ」と言われたんです。

その家は、もう今はお兄さんのお嫁さんが中心にいる家庭になっていました。ママさんのことは、その家にとって見て欲しくない、隠していたいことになっていたんですね。お母さんから「もうちょっとしたら子どもが学校から帰ってくる。その子どもには、おばさんがいることは一言も言っていないから、すまんがすぐ立ち去ってくれ」と言われたんです。

がっくり来たそうですよ。死のうと思って来たのに、立ち去ってくれと帰されるんですよ。

「ああ、もういいや」と思えて、笑えてきてしまった。じゃあすぐに立ち去ろうと立ち上がったら、その時に、台所からお仏間が見えたんです。おばあちゃんの写真が目に入りました。最後におばあちゃんに挨拶してもいいかと聞いたら、いいよと言われたので、お仏壇の前に座ったそうです。おばあちゃんは自分が家出する前に亡くなったけれど、生前は本当にかわいがってくれた。十何年ぶりに仏壇の前に座ったら経卓きんじよくに聖典がある。何気なく開いたら最初に正信偈しょうしんげがあります。文字を目で追うと、それが不思議とすんなり読めたんです。小さい頃に、おばあちゃんといつも正信偈をお勤めしていたから。一緒にお勤めしたらお小遣いをくれたんですね。

正信偈を読んでいたら封印していた記憶が込み上がってきたそうです。いろんな思い出が出てきたけれど、いつもおばあちゃんが「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とお念仏しておられたこと。「勿体ない、おかげさま」と言っていたこと。その時の雰囲気が込みあがってきた。

その中で、ものすごい思い出がボンッと出てきました。小学校6年の時、近くのお寺の日曜学校で、ご住職が言われた言葉でした。

「あなた方は、これからいろんな人生を歩むと思います。この人生、決して思い通りにはいきません。病で泣くかもしれない。貧しさで泣くかもしれない。時には、死のうと思うこともある

かもしれないけれど、この阿弥陀さまは、どんな時もしっかりとあなたを抱いていらっしやるんですよ。」

それを聞いた当時は何も思わなかったけれども、まさに今、地位も仕事もお金も、信頼している人も失ってしまった苦しみの真ただ中において、阿弥陀さまがいてくださったという思いが込みあがってきたんです。わんわん泣きながら正信偈を最後まで読んだのだそうです。

そして、そこから人生をもう一回やり直した。そういう話を聞かせてくれました。

そのスナックのママさんが、つくづく思ったのは、たとえ愛しい人に裏切られても、全財産を失っても、親に冷たくされても、仕事を失っても、大丈夫なんだということです。それで揺らぐような命ではないんだということを、阿弥陀さまに知らされたんです。

それから、もう実家には帰っていないということでした。今は、正月やお盆はお寺へ参って、阿弥陀さまに会わせていただくのが、心のよりどころだと仰っていました。

その後、こうも言っていましたよ。四十過ぎに成って、あの時娘である私に「出ていってくれ」と言わざるを得なかったお母さんも辛かったんだだろうと思うと。本当は、煮えくり返るくらいの気持ちで、聞きたいことがたくさんあっただろう。でも、その聞きたい気持ちを、鉛を飲むよう

な思いで飲みこんで、「出ていってくれ」と言わせてしまったのは私の行いだったのかもしれない。本当に、親不孝をしたと、その時は涙ぐんでいらっしやいました。その姿がずっと印象に残っています。

きっと、広島で住職になる私のために、あえてそのママさんは私に自分のことを語ってくださいっ
たんだと思います。

ご讃題の

「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし

摂取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる」

は、阿弥陀さまだから救うというのではなく、決して私を見捨てない働きを阿弥陀と言うのです。私達は自分で自分を見捨てようとすることも、この人生にはあります。でも、自分で自分を見捨てても、声となつて届いている阿弥陀さま、それがお念仏です。

みなさん、たとえ地位がなくても、財がなくても、人に見捨てられても、大丈夫なんですよ。阿弥陀さまはそんな私を見捨てないのです。お念仏があるんです。

最後に一緒に口でお念仏を申していただけませんか。声に出して、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。もう一度、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。これほど幸せなことはいんです。この幸せを示してくださったのが、お釈迦さまであり親鸞さまであるということを、報恩講ではしみじみと噛み締めさせていただきたいと思います。

【文責宗教部】

(二〇三二年十二月十五日 お逮夜法要)

ブツダは人工妊娠中絶を責めるか

大谷由香

(本学文学部 准教授)



大谷 由香 (おおたに ゆか)

香川県坂出市 出身

2006年 龍谷大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了 (博士 [文学])

2007年 龍谷大学非常勤講師 (～'17年)

2010年 浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター非常勤研究助手 (～'12年)

2012年 日本学術振興会特別研究員 (～'14年)

2014年 浄土真宗本願寺派中央仏教学院講師 (～'17年)

2017年 京都女子大学非常勤講師 (～'18年)

2017年 龍谷大学文学部講師

2020年 龍谷大学文学部准教授

専門分野は仏教学、特に日本仏教における戒律解釈の研究。

【著作】

『中世後期 泉涌寺の研究』 (法蔵館'17年)

「蓮如上人周辺と泉涌寺系浄土教団「見蓮上人門徒」について」 (『眞宗研究』58/'14年)

「入宋僧俊蒔を発端とした日宋間『円宗戒体』論争」 (『日本仏教総合研究』14/'15年)

「入宋僧俊蒔と南都戒律復興運動」 (『印度學佛教學研究』65(2)/'17年)

「東大寺戒壇院の『塔』」 (『東大寺の思想と文化』東大寺の新研究3/法蔵館'18年)

「南山三観と日本律宗」 (『唐招提寺の伝統と戒律』覚盛上人御忌記念/法蔵館'19年)

「中世律宗復興の中の行基」

(『論集・東大寺と行基菩薩』ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第18号/法蔵館'20年)

「凝然の華嚴学と律宗」 (『凝然教学の形成と展開』凝然大徳御忌記念/法蔵館'21年)

「不殺生と自死」 (第18回涙骨賞論文本賞/'22年)

「僧兵と不殺生」 (『歴史学研究』1040/'23年)

ほか多数。

こんにちは、大谷と申します。今日の講題を聞いて驚かれた方もいるかと思います。

中絶ということについて、こうして大っぴらに語られることはほとんどありません。しかし、特に若い方にとっては妊娠や中絶は他人事ではないことでしょう。妊娠は女性にとってはもちろん男性にとっても、一生を一変させてしまう一大事です。

もしかしたら、この場、あるいはオンラインで聞いてくださってる方の中には、中絶の経験がある方、あるいは妊娠したかもしれないとヒヤヒヤした経験がある方がおられるかもしれません。また、ご自身ではなく、家族や友人にそういった経験をした方がおられるという方もいるでしょう。

本題に入る前に、私が中絶を経験をされた方々に伝えたいのは「私は、あなたのその選択を尊重します」ということです。非常に辛い経験をされたことであろうと思います。大変でしたね。しかし、そういった事があったからこそ、今ここで私とあなたは出会っています。あなたの選択は決して間違ったものではないと思っています。

アメリカにおける中絶禁止措置を認める判決

二〇二二年六月二四日にアメリカの連邦最高裁が、妊娠中絶禁止措置を認める判決を下したことが最近話題となりました。

アメリカでは一九七三年に人工妊娠中絶の権利を認めた判決が出ています。一九六〇年代の後半からウーマンリブ（女性解放運動）が起こり、その中で女性に妊娠中絶の権利を認めようという運動が起こりました。それが認められたのが七三年の判決です。今回の判決はそれを覆すもので、世界中が「まさか自由の国アメリカでそんなことが起こるなんて！」という衝撃を受けました。

一方で、妊娠中絶に反対の立場を取り、「妊娠中絶は子殺しである」「法律で規制すべきだ」とずっと主張してきたのがキリスト教の福音派です。ですから、二〇二二年の最高裁の判決は、彼らにとっては約五〇年ぶりの悲願達成であったということです。

このような流れを見えますと、やはり妊娠中絶ということが殺人に当たるのか当たらないの

か、というところが問題となっていて、そのどちらなのかという判断が人々の倫理的な感覚に触れるのであろうと思います。だからこそ、そこに宗教的な後ろ盾が求められることもあるのでしょう。

私は個人的に、苦しむ人を苦しいままにしたり、苦しむ人をさらに追い詰めてしまうように宗教の教義が働きかける状況は良くないと思っています。

妊娠中絶禁止措置を認める判決が出てから、アメリカの多くの州が中絶手術の禁止を法律で決定しました。中絶が禁止になった州に住んでいる女性が中絶をするためには、他州まで行って処置を行わなければならないになりました。しかし、アメリカというのは非常に広い国ですから、隣の州といっても、場合によってはかなり遠いのです。そういった遠方のクリニックに通うほどに金銭的余裕がない女性の場合、近くで非合法に処置してくれるような場所を探して、違法に手術を受けなければなりません。場合によっては、自らが処置をするということもあり得ます。いわば生み捨てのようなことを行わなければならない場合もあるでしょう。これは女性の体にとって非常に厳しいことです。しかし、そういうことをせざるを得ない状況ができてしまったのです。

妊娠中絶の禁止は「妊娠した女性のため」ではなく「胎児の命を守るため」という名目で行われます。レイプによって妊娠してしまった場合においても、あるいは父親や兄弟からの性的な虐待によって妊娠してしまったという場合においても、妊娠中絶の禁止は適用されます。すべての妊娠が必ずしも望んだ結果ではない女性にとって、二〇二二年の最高裁判決は、当事者の苦しみを無視した大変に厳しいものだと言わざるを得ません。

日本における中絶の実態

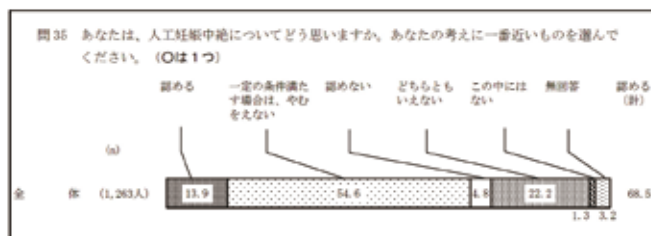
一方で、日本では母体保護法という法律で定められた適応条件に当てはまる場合には中絶をすることができ、全ての妊娠が禁止されているわけではありません。しかし、そんな日本においても、中絶には禁忌的なイメージがあります。結果として望まない妊娠をした女性が中絶出来ず、乳児の殺害・乳児遺体の遺棄、というようなことに繋がり、女性だけが逮捕されてしまう。相手の男性が罪に問われることはあまりありません。こういう事件のニュースを頻繁に見聞します。

日本家族計画協会は二〇〇八年から二〇一六年に「男女の生活と意識に関する調査」をしています。その二〇一六年の調査報告から、中絶についての意識に関する調査結果を紹介させていただきます。

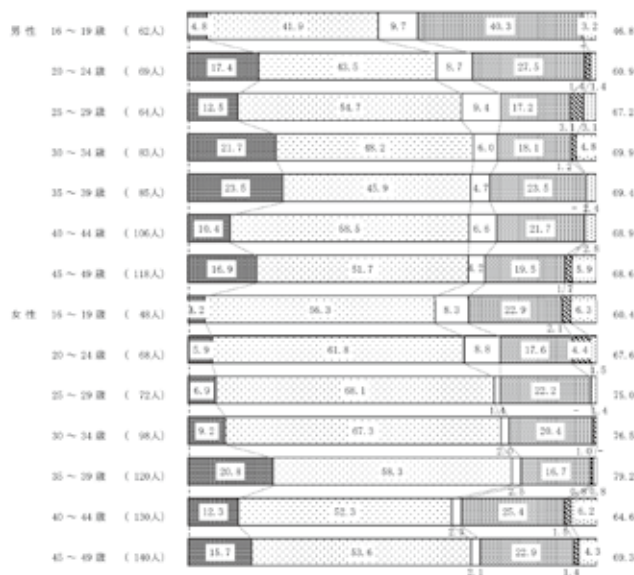
まず、人工妊娠中絶という行為が認められると思うかどうか、といった認識調査の結果をみてみましょう（表1）。全体でみたとき、「認める」と「一定の条件を満たす場合はやむを得ない」という意見が合わせて65.5%で、大勢を占めています。半数以上の方が、積極的には肯定できないけれども、まあ、しかたがないときもあるよね、という意見のようですね。

一方で「認めない」と明確に回答する人は、男女共に若年層に多いことがわかります。若い人ほど中絶に否定的な意見を持っている人が多いようです。しかし、女性では二六歳から二九歳になると「認めない」という回答がガクンと一気に減ります。当事者になる可能性が高まる年齢になると、中絶を「認めない」とする意見を維持することができなくなることです。当事者にならない性、もしくは当事者意識の低い年代の人たちほど、中絶を「認めない」「良くないことだ」と考えているということがわかります。

表. 1



(性別×年齢)



しかし多くの場合、はじめて妊娠中絶に直面するのは若い時です。なのに若い人ほど、周りに「妊娠中絶なんてとんでもない」「人殺しだ」と考える人が多く、場合によっては自分自身もそう考えていて、いざ当事者になったときに追い詰められてしまうという状況が見えてきます。

続いての設問は「最初の人工妊娠中絶手術を受けることを決めた理由を教えてください」というものです（表2）。もちろん、いろいろな複雑な思いがあるでしょうがその中で一つだけ選ぶとしたらどれですかという設問です。

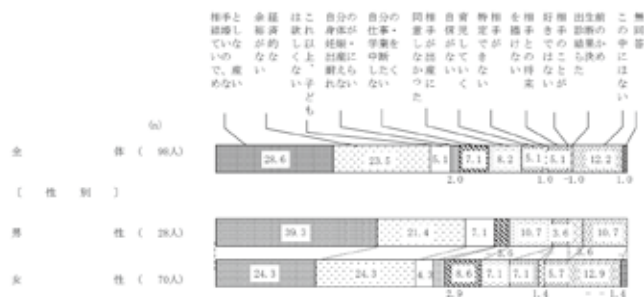
「相手と結婚してないので産めない」

「経済的な余裕がない」

「これ以上子供は欲しくない」

表. 2

図8-3-1 最初の人工妊娠中絶手術を受けることを決めた理由（性別）



「自分の体が妊娠出産に耐えられない」

「自分の仕事、学業を中断したくない」

「相手が出産に同意しなかった」

「育児していく自信がない」

「相手が特定できない」

「相手との将来を描けない」

「相手のことが好きではない」

「出生前診断の結果から決めた」

「この中にはない」

「無回答」

という選択肢で、この中から選んで回答することになっています。この中で一番多い回答は「相手と結婚していいないので産めない」で、次が「経済的な余裕がない」というものです。過半数がこの二つの理由を回答しています。

一方で、「自分の仕事、学業を中断したくない」というような自分の都合、自分の将来を考えた時に今の妊娠は困るというような理由で中絶をした方は少ない（全体7・1%、男性3・6%、女性8・6%）ようです。実際に妊娠期間を過ごし、出産を担うのは女性ですから、男性より女性の方が、今ここで妊娠してしまうのは困るということで、決断をされた方が多いそうですね。しかしこのように自分自身の今後の人生を考えて決断したという方は全体からみれば少数です。先に示したように、多くの人は「相手と結婚していない」「経済的な余裕がない」という、自分だけではどうしようもない理由を中絶の理由として挙げるのです。条件さえ揃えば産みたかったけれどもどうしようもなく、しかたなく、中絶に踏み切ったのだという苦しみが見えてきます。

この中で気になるのが「相手と結婚していないので産めない」（全体28・6%、男性39・3%、女性24・3%）と答えたのは男性の方がすごく多いんですね。不倫による妊娠なのかなという感じも透けて見えてきます。対して女性は、男性に比べると意見がばらけます。自分では産みたいと思っけていても相手と結婚しているわけではないし、経済的な余裕もない。そうすると育児していく自信も持てないし、相手との将来も思い描けない。いろいろな思いを抱えながら選択肢の中の一つを選んだのだらうと想像します。

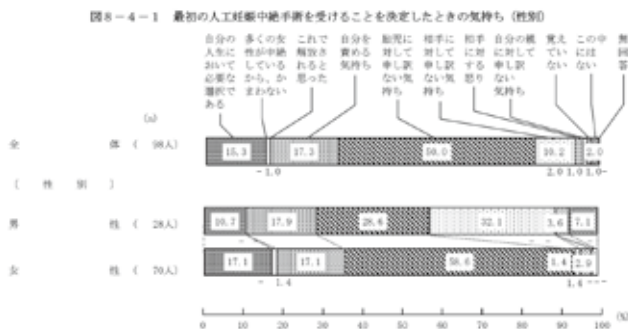
このように、どうしようもない、仕方がない、と思いつながら中絶に踏み切った方が多いのですが、それでも「必要な選択だった」「自分の人生にとって、どうしようもなかった」と思い切れる方は少ないようです。次の設問は「最初の人口妊娠中絶を受けることを決定した時の気持ちを教えてください」というものです（表3）。「自分の人生において必要な選択である」と答えられた方は（男性10・7%、女性17・1%）、全体では（15・3%）でした。他の選択肢としては、

「多くの女性が中絶をしているから構わないじゃないかという気持ち」

「これで解放されるという気持ち」

「自分を責める気持ち」

表. 3



「胎児に対して申し訳ない気持ち」

「相手に対して申し訳ない気持ち」

「相手に対する怒り」

「自分の親に対して申し訳ない気持ち」

「覚えていない」

「この中にはない」

「無回答」

こういった選択肢があります。

女性の場合、圧倒的に多いのは「胎児に対して申し訳ないという気持ち」（58.6%）です。男性の場合は「胎児に対して申し訳ないという気持ち」（28.6%）と「相手に対して申し訳ないという気持ち」（32.1%）が拮抗しているというような状態です。「多くの女性が中絶しているから、かまわない」という気持ちで中絶を迎えられる方は、男女ともに一人もいません。皆が自分の身に起きた一大事として、真剣にその命に向き合っているのです。

この調査結果は、自分だったら、と置き換えて考えてみても、なんとなく納得できるのではないだろうか。結婚もできないし、育てられる経済状況でもない。どうしようもなくて選んだ結果なのに、その選択を肯定できず、ずっと申し訳ないという気持ちを抱えている。これが日本の中絶の実態です。

こういった苦しみを抱えている当事者の人々に、仏教は何を語りかけることができるのでしょうか。それが今日、私が考えたいことです。

仏教は中絶をどう見るか

私は戒律について研究しています。

お釈迦さまは、家庭生活を捨てて修行に専念する人々で共同生活を行い、切磋琢磨してさとるを目指す教団を作られました。共同生活にはルールが必要です。そこで、ルールブックとして作られたものが律藏、戒律の「律」です。

一方の「戒」は、菩薩として人々を救いながら自分自身も修行していこうと決心した時に、その指針となる生き方として示されました。

今回は特に律蔵において中絶がどう扱われているのかということについて調べてみました。

問題になるのは「人を殺してはいけない」という規則です。これは、四波羅夷と呼ばれる、お坊さんとして生きていく上で最も重い四つの罪の中の一つに入っています。これを犯した人は教団を追放されてしまいます。仏教教団では教団追放が一番重い罰なんです。

では、「人を殺してはいけない」の「人」とは何なのでしょう。きちんと定義されています。

『四分律』という本では、「初識から後識に至るまで（『大正大蔵経』二三卷・五七六頁・下）、つまり初めて認識が起こってから認識がなくなるまでが人であるとされています。また『薩婆毘尼毘婆沙』という律蔵の注釈書には、父と母との精が合わさって識処という認識の居所となり、身体の根（身根）と命の根（命根）という人としての根源的なものを得ると説明されています（『大正大蔵経』二三卷・五一八頁・下）。つまり、受精の瞬間に認識が始まり人となるのだ、というのですから、これだけを見ると、「じゃあ、やっぱり中絶はダメなんじゃないか」という話になります。受精した瞬間からが「人」なら、中絶は殺人です。ですから、「仏教では中絶は厳しく

戒められるものである」と言われていたことが実際にあります。

しかし、妊娠中絶を殺人として一括りにしてしまうのは乱暴な気がします。個別の事例としてもっと丁寧に資料を読み解く必要があるでしょうね。

律蔵では殺人方法としての中絶に「墮胎」と「按腹」を想定しています。墮胎は、妊娠した女性に薬を飲ませたり、薬を注入したりして妊婦自身や胎児を殺害する方法です。按腹は妊娠した女性に重労働をさせたり、重いものを背負わせた上で、車の前を走らせたり、あるいは崖に登らせたりして、妊婦や胎児を殺害する方法を指します。いずれの場合も「お坊さんが他者である妊婦にこれらの方法でもって危害を加え、妊婦さんや胎児を殺した場合には、波羅夷という重い罪を得る」と制定されています。ここで注目したいのは、妊娠当事者の女性に対して中絶が禁止されたわけではないという点です。

律蔵というものは、家庭生活を捨てて修行生活に専念する男女に向けて説かれます。出家者は性行為が禁止されますから、本来的には妊娠を想定する必要がありません。だから妊娠した女性が、自分自身のお腹の中に宿った命を自分で中絶する場合について、律蔵に説かれる規則をもと

に論じていくのはナンセンスなようにも思いますね。でも、そうでもないのです。出家した女性もまた妊娠してしまうことがあり得たからです。

ここで押さえておかねばいけないのは、お釈迦さまが活躍された時代のインドが、非常に男性主権的な社会であり、もちろん避妊法も確立されておらず、女性が望まない妊娠をしてしまうということが日常的に起こり得る社会だったということです。

例えば、女性は阿蘭若^{あらんじやく}という場所には行つてはいけないという規則があります。阿蘭若は修行場として出家の人たちが自由に修行に使うことができるように開かれている広場です。仏教の出家者も、他の宗教の出家者も使います。なぜそこに女性が行つてはいけないのかというと、女性が一人でそういうところに行くくとレイプ被害に遭う可能性が非常に高いからです。

また、女性は一人では行動してはいけないという規則もあります。一人で村を歩いているとレイプ被害に遭うことが考えられるからです。そのような規則が定められるほど、当時のインドは女性にとって厳しい状況であったということです。そういった状況下では、望まない妊娠をしてしまうことがままありました。律蔵に、他人である妊婦の中絶を行うことが禁止される一方で、

たとえば女性出家者である比丘尼が妊婦となった場合の中絶について触れられていないのは、そういった女性側の事情がある程度は酌まれた結果とみることでできるのではないかと思うのです。もう少し詳しく見ていくと、律蔵には女性に中絶方法を教えるお坊さんが出てきます。『善見律毘婆娑』(『大正大藏經』二四卷・七五三頁・上)に紹介されています。

ある女性の夫が遠くに行って戻りませんでした。女性は、夫はもう死んでしまったのだらうと思いい、別の男性と通じてしまいます。そして、結果として妊娠してしまいました。しかし、そこに死んだはずの夫が帰ってきてしまいます。そこで、女性はお坊さんに「中絶しなければいけないので薬をください」とお願いします。相談されたお坊さんは、追い詰められている女性に「こういう方法があるよ」と中絶方法を教えました。

律蔵ではこのお坊さんの行為が罰せられるべきかが問題となります。このお坊さんの行為をお釈迦さまは責めませんでした。

お坊さんが、今まさに困っている女性に、具体的な中絶方法や、あそこの病院で手術が受けられるということを教えたとしても、罪にはなりません。

もし、お坊さんが直接に手を下して中絶させた場合、これは律蔵規定違反です。しかし、困っているのを教えてくださいと言われてその方法を教えたが、自ら手を下したわけではない場合には罪にはならないということです。

また『根本説一切有部毘奈耶』(『大正藏經』一三卷・六五四頁・中〜六五七頁・中)には、こういった事件も紹介されています。

兄の奥さんを妊娠させた弟が「このままでは兄に殺されてしまう」と思い、逃げるために出家します。そして、その事情を知った親戚の医療関係者が墮胎薬を作り、兄の妻に飲ませたというものです。弟は親戚から「薬を作って彼女に飲ませよう」と言われた時に「わかった」と了解しています。これは罪になるのでしょうか。

この事件に関して、お釈迦さまは事情聴取を行います。そして、すでに出家してお坊さんになっている弟に「お前は親戚に、是非とも中絶させてくれと指示をしたのか」と聞きます。すると弟は「いいえ、私は指示はしておりません」と答えます。「私は墮胎させようとしたのではありま

せん。親戚が「墮胎薬を作るから飲ませよう」と言ってくれたので、それは嬉しいなという気持ちになりました」と答えます。お釈迦さまはその僧侶に「そう思うのは良くない。良くないけれども、これによって殺人の罪を得るということはない」と仰いました。

女性である私自身は、他人の妻を妊娠させて逃げ、その上に自分の都合で流産させるなんて、この弟はあんまりにもひどいじゃないか、なぜ罪に問われないの？ と個人的に思うのですが、やはり、そのお坊さんが直接自分で手を下したわけではなく、また墮胎させようという強い意志を持って自分自身が行ったというわけでもない場合には、結果的に中絶が行われ胎児の命が失われたとしても、殺人の罪にはならないとお釈迦さまは仰ります。そこが線引きなのですね。

納得がいけないところはあるけれども、しかしその線引きによって、女性が中絶する自由が守られたとも言えます。男性の力が強かった古代のインド社会において、彼女が不貞の結果としての妊娠を継続する選択は全く考えられません。「出家前に女性を妊娠させたお坊さんが、現在お坊さんであるがゆえに、中絶には全く関わってはいけない、自身で指示せずとも、他人がお坊さんのために女性を中絶させたのであれば、そのお坊さんは罪を得る」ということになれば、その

お坊さんは出家前に女性を妊娠させた事実を隠し通そうとするかもしれませんが。あるいは自らの罪とならないように、子を宿した妊婦に中絶を禁じたかもしれませんが。そうすれば彼女は妊娠を個人の責任として抱えなくてはならず、彼女の立場はより危険なものになるでしょう。

このように中絶は、あまりにも日常的でした。出家した男性にとってさえ、無関係なことではなかったのです。女性が望まない妊娠をしてしまうことが多く、弱い立場に置かれていた当時において、お釈迦さまは決して女性を追い詰めるようなことはなされていなかったのだらうと思います。

胎児の命を疎かにするわけでも蔑ろにするわけでもないのですが、当時の女性が置かれた苦しい環境があり、その環境の中でできることをお釈迦さまは説いていかれたということが見えてきます。

実際、律蔵以外の仏典に中絶をした女性を責めるような言葉があるかと探してみましたが、私がまだ調べ足りないだけかもしれませんが、それを見つられておりません。

仏典の中では、妊娠した他人のお腹の中の子を殺すのはいけませんよと出てきますが、自分の

お腹の中の子を中絶してしまった女性がきつく怒られたというようなお話は出てこないと言っているんじゃないかと思います。

現代日本女性が置かれている立場を振り返ってみると、根本的なところでは、仏典に出てくる女性と大きくは変わらないのではないでしょうか。女性が自らの意志一つで子を産み育てるということは難しく、また、女性が主導権を握れる避妊法もメジャーではありません。多くの女性は、妊娠してしまったら、男性の経済力を頼らざるを得ず、また世間体も気になります。先に「相手と結婚していない」「経済的な余裕がない」という理由で中絶をされる方が多い、というお話をしました。仏典に登場する、妊娠に右往左往する古代インドの女性の姿は、私には現代日本の女性の姿に重なって見えるのです。

だからこそ、お釈迦さまが、中絶という選択を取った女性に対して、その女性の責任だと責めるような言説が仏典にみつからなかったことは、調べていた私自身にとっても新鮮な驚きでした。私自身、どこか妊娠中絶を女性の責任とする考えにとらわれていたのだろーと思えます。そして仏教という宗教が、古代インドという男性主権的社会で生まれながらも、女性の苦しみ寄り添う可能性を有したものであることに、とても救われた気持ちになるのです。

釈尊は悔いるものにどう接したか

さて、日本家族計画協会の調査から、妊娠中絶を経験した方は、男性であっても女性であっても「申し訳ない」という強い後悔の念を抱えていることがわかりました。仏教では中絶行為は禁止されているとは一概には言えませんよ、と伝えたところで、彼女や彼が気にしているのは、そういうことではないでしょう。仏教で許容されているなら安心、とはなりません。彼女や彼は自らの選択によって失われた命を思っ、て、「申し訳ない」と思うのです。そういうった思いを持たれている方に、お釈迦さまはどのようにお声がけするのでしょうか。

先ほどもお話したように、インドはずっと男性主権社会でしたので、お釈迦さまがお話を説く相手は男性であることが多いです。もちろん、女性が主人公になる経典もありますが少ない。さらにその中で中絶についての話というのはなかなか出てきません。つまり、お釈迦さまが中絶を経験した女性当人に教えるを説く、というお話は仏典の中には紹介されていないんです。

しかし、仏典には自らの都合によって自らの大切なものを壊してしまい、非常な後悔を抱える

ことになった人が登場します。

そのような人の一人が阿闍世あじやせです。阿闍世は『観無量寿經』にも出てくる人物ですので浄土真宗の方にとっては馴染み深い人ですね。

阿闍世は、釈尊に敵対した提婆達多だいばだたにそそのかされて、お釈迦様を外護していた父王・頻婆娑羅びんばしらを殺害し、自らが王位につきました。『涅槃經』梵行品はんぎょうぼんには、この阿闍世が「罪なき父を殺した私は必ず阿鼻地獄あびじごくに落ちるだろう、なんということをしてしまったのか」と深く後悔して恐れ、お釈迦さまのもとを訪れるというお話が紹介されています。

父を殺した阿闍世に対して、お釈迦さまは「そら見たことか。お前が悪いことやったからだ」とは仰いませんでした。「あなたは地獄に落ちない。落ちるわけがないでしょう。あなたに罪はないのだ」ということを、言い方を変えながら何度も語りかけていかれます。

自ら父の命を奪わざるを得なかった阿闍世の苦しみは、まさに自らの選択によって子を失った方の苦しみと重なると思うのです。お釈迦さまの阿闍世への多くの語りかけのうち、二つを紹介いたします。

一つ目は、

「王よ、あなたがもし罪を得るのであれば、諸仏もまた罪を得ることになるでしょう。なぜならば、あなたの父であり先王であった頻婆娑羅は、生涯を通じて諸仏を供養し、善根を植え続けたから、王位に就くことができたのです。諸仏を供養することがなければ、頻婆娑羅は王にはなれなかったでしょう。頻婆娑羅が王でなければ、あなたは彼を殺害することもなかったでしょう。あなたに父を殺した罪があるのであれば、私たち仏にも罪があるということです。もし諸仏に罪がないのであれば、あなただけがどうして罪を得ることがありましようか」

（『大正大藏經』十二・四八三頁・下）

というものです。

ここで、お釈迦さまは「あなただけの罪ではない」と阿闍世に語りかけています。

なぜなら阿闍世は、父が王だったから王位を奪いたくて父を殺しました。お釈迦さまを外護し

ていた父は、その功德によって王に成ったのです。あなたが父を殺したいというきっかけを作ったのは仏なのだから、私にも罪があるのだとお釈迦さまは語りかけます。

私は中絶を経験した当事者にも、同じように語りかけてあげられるのではないかと思います。「あなただけの罪じゃないですよ」「この環境を構成している私も加担者なんですよ」という語りかけです。

もし女性が主導権を握ることができる避妊法が簡単に選択できる社会であれば、あるいは心や身体に負担の少ない中絶法が確立されていて、中絶を選択した人を責めるような社会風潮がなければ、彼女は悩まずに済んだかもしれない。あるいは、もし結婚していなくても、経済的基盤がなくても、妊娠した子を産み育てたいと思って、その気持ちだけでなんとかなる世の中であれば、彼女は中絶を選ばずにすんだかもしれない。でも現状、社会はそうはできていない。そんな社会の構成員の一員として、その社会を変えようと努力してこなかった私は、結果的にその誰かが中絶を選ぶよう後押しをした一人です。中絶を選択した方に、もしも罪があるならば、それはこの社会の罪であり、そしてこの社会の支持者である私の罪でもあります。それなの

に、中絶をした一人の女性だけに、私たちは罪を被せようとしているんじゃないでしょうか。

自らの苦しみを自分事としていっしょに背負ってくれる存在があるということは、救いだろーと思います。もしあなたの周りに中絶の過去に苦しむ方がいらっしゃるなら、お釈迦さまと同じように、他人事ではなく、自らも当事者ではないかと振り返ってみることが大切ではないでしょうか。そうして、苦しむ彼や彼女に「これはあなただけの罪じゃない」と声を掛けることができます、すてきだと思うのです。

もう一つ、お釈迦さまが阿闍世にかけた言葉を紹介しましょう。

「大王よ、王は宮中において日常的に羊の屠殺を命じていましたが、その時には懼れの心はなかったでしょう。どうして父を殺したことに 대해서 だけ懼れを抱くのでしょうか。人と獸との区別はあるでしょうが、命をたもち死を畏れる気持ちはどちらも異なることはありません。どうして羊に対しては心軽く懼れもなく、父である先王に対しては心重く憂慮の苦悩を生じるのでしょうか。大王よ、世間の人は、愛の下僕であって自由を得ることはありません。

愛に使役されて殺害を行うのです。たとえ果報があるとしても、それは愛の罪です。王は自由ではなかったのです、どのような咎があるのでしょうか」

〔大正大藏經〕十二・四八四頁・中〕

阿闍世は王様ですから、宮中での食材として使用するために、一日に屠畜する羊の数を決めます。そうして毎日羊を殺すことには罪の意識を感じないのに、父親を殺した時だけなぜそんなに恐れて辛い思いをしているのか、とお釈迦さまは語りかけます。その理由は「あなたに愛があったからでしょう」というわけです。「あなたは父を愛していた。だからそんなに辛いんでしょう。そして、この愛から自由な人間がいるでしょうか。あなたは愛の奴隷だったのです。だからこんなに苦しむんですよ」と説かれているわけです。

愛は仏教では良くないこととして否定されます。なぜなら、愛とは執着と同義だからです。本来、羊の命と自分の父親の命は平等です。しかし、同じ命にも関わらず父親の命の方が重いと思ってしまう。では、その思いはどこから来るのかというと、愛という執着から来るのです。すべての命が平等であるにもかかわらず、平等に見れなくしてしまうのが愛だから、愛は否定され

るべきものなのだというのが仏教の教えです。

しかし、お釈迦様は阿闍世に「仕方がないじゃないか。愛から逃れられる人間はいない」と語りかけておられます。私はここに非常に心を打たれました。

阿闍世は自分自身が可愛かったのです。自分が愛されたかったし、自分を愛していた。だからこそ、王位に自分が就きたいと思う。自分の方が父親よりも正しい行いができると思う。きっと自分の方が、自分が愛する領民たちを幸せにできるとも思うわけです。そのためには父に退いてもらわねばならない。そうして愛ゆえに父を殺すんですけども、今度はまた、父への愛ゆえに父を殺したことを悔やんでいます。

私は、この阿闍世へのお釈迦さまの説諭は、中絶を選択された当事者の人にもかけることができる言葉なんじゃないかなと思います。

中絶を経験した彼女、あるいは彼は、胎児やパートナーに非常に申し訳ないと感じておられます。胎児や相手に申し訳なく思い、自分を責めるような気持ちになります。

しかし、そう思ってしまうのは、その対象を愛していたからでしょう。決していい加減な気持

ちからではないのです。愛ゆえに、どうしても産めないし、愛ゆえに、その結果をととても悲しく思っているのです。そして、その愛から自由な人はどこにもいません。皆、愛の奴隷なのです。愛さえなければ、この悲しみも苦しみも感じることはなかったでしょう。でも私たちはどうしたって愛にとらわれていて、離れがたい。愛しているのです。どうしようもないのです。

阿闍世に、「愛から自由な人はいない」と説いたお釈迦さまは、中絶されて苦しむ方にもきつと同じようにお声掛けされるのではないかなと思います。

そうして、どうあがいたって、私はそのようにしか生きられなかったじゃないか、この選択しかなかったじゃないか、どうしようもなかったじゃないか、という事実を飲み込んで、これから生きていこうよ、と、お釈迦さまはきつと仰るのではないかなと私は受け止めています。

これは決して、頻婆娑羅王や、胎児の命を軽く見るということではありません。

そうとしか生きられなかった私を、そのまま受け止めて共に悲しんでくれる存在が居るんだということ、そうとしか生きられなかった私にかけられている願いがあり、光があるということを、ぜひ知ってほしいと思います。

苦悩の有情をすてず

親鸞聖人は、『教行信証』に、この『涅槃經』梵行品を長く引用されます。それは阿闍世の罪を、ご自身に引きつけて考えられたからでしょう。

親鸞聖人は阿闍世を到底治療したい病を抱えた者にたとえられます。そして、誰もがさじを投げるような病人を憐れんで、治療しようと手を差し延べてくださる阿弥陀仏の大いなる慈悲にもとづく本願にまかせましょう、とおっしゃいます。好きこのんで病になる人はいません。でもいろいろなことが絡み合って人は病を得ます。父を殺してしまった阿闍世もまた、好きこのんで罪人となったわけではないのです。それでも、この世界に生きて、さまざまな思いが絡んでそのような手段しか選べなかったのが阿闍世でしょう。そして、それは中絶を選択せざるを得なかった方も同じでしょう。親鸞聖人はそのような者にこそ、仏の教えが開かれているのだ、と告示しなされるのです。

親鸞聖人はこういったご和讃を読んでくださっています。

久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあはれみて

釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現する

〔浄土和讃〕／『浄土真宗聖典―註釈版―』五七二頁

阿弥陀仏は久遠の昔に成仏を遂げたが、末法という時代に生れ五濁という汚濁に直面しなければならぬ愚かな凡夫である私を哀れんで、釈迦族の都の城である迦耶城（カピラヴァストゥ）に、凡夫である私にも認識できる姿としてお釈迦さまの姿をお示しになられたのです。といった意味のご和讃です。

私が今日紹介したのは、お釈迦さまが教団の中で弟子たちに対してどういうルールを作ったのかというお話、あるいは、お釈迦さまが阿闍世に説かれたお話です。しかし、それはそのまま阿弥陀仏が現在を生きる私に語りかけるために示してくださった姿なのだと私は受け取らせていただいております。

もう一つ、こういったご和讃があります。

如来の作願をたづねれば 苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまひて 大悲心をば成就せり

〔正像末和讃〕／『浄土真宗聖典―註釈版―』六〇六頁

こちらは、阿弥陀仏がどうして四十八の誓願を立てられたのかという理由を探ってみたならば、苦悩する私を捨てないためであり、自らが修行された功德を私を救うために回向し、それが第一に大切なことだと考えられて、大いなる慈悲の心を完成されたのです。という意味のご和讃です。阿弥陀仏の願い。あるいは、それによって現れてくださったお釈迦さまの教え。その根本は何なのかというと、苦悩する私を捨てないためなんです。

中絶という非常に重い決断を迫られた方、あるいはそういったような方を身近に知っておられて、いっしょに悩んでおられる方、そういった苦悩を抱える者を救うために仏教は開かれてきたのだと親鸞聖人は仰っておられるわけです。

福音派では「中絶は子殺しである」と言われていますとご紹介しました。そうやって、宗教の教えが苦悩している人をさらに追い詰めるような形で紹介されてしまうのは、非常に悲しいこと

(二〇二四年七月十六日 ご命日法要)

杉岡先生を偲ぶ

高田 文英

(本学文学部教授)



高田 文英 (たかだ ぶんえい)

1977年生まれ、福井県出身。

1999年 早稲田大学第一文学部東洋哲学専修卒業。

2005年 龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻満期退学。

2005年 浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員(～'08年)。

2008年 博士(文学／龍谷大学)。

2009年 龍谷大学文学部講師に就任、現在に至る。

【著作】

「源信撰『阿弥陀経略記』の行業論—無縁慈悲観を中心に—」

(『日本浄土教の諸問題』/'11年)

「真宗先哲の地獄論—近世・近代を中心に—」(『真宗研究』56/'12)

「法然『往生要集』釈書の研究—『詮要』・『法然上人伝記(醍醐本)』を中心に—」

(『龍谷大学論集』484/'14年)

勧学寮編『親鸞聖人の教え』(共著／本願寺出版社/'17年)

「『教行信証』報化二土の引文を読み解く—懈慢界説の歴史的帰趨—」

(『真宗学』137・138/'18年)

『国際社会と日本仏教〈龍谷大学アジア仏教文化研究叢書17〉』

(共著／丸善出版/'20年)

「『往生要集』の念仏思想(一)」(『真宗学』143・144/'21年)

など。

讃題

安樂浄土あんらくじょうどにいたるひと 五濁悪世ごじよくあくせにかへりては

釈迦牟尼しゃかに仏のごとくにて 利益衆生りやくしゆじやうはきはもなし

〔浄土和讃〕／『浄土真宗聖典―註釈版―』五六〇頁

皆さま、ようこそお参りいただきました。今期最後のご命日法要です。

本日は「杉岡先生を偲ぶ」という講題を出させていただきました。思ったより大変多くの方に足を運んでいただいて驚いておりますが、ああそうか、これはきつと杉岡先生のご人徳によるものだなと納得をしたところであります。

杉岡孝紀先生について

この法要はYOUTUBEでも配信されているとのことですので、配信で視聴されている方の中には杉岡先生をご存知ない方もいらっしゃるかもしれません。

杉岡先生のことを少しご紹介させていただきますと、先生は本学文学部真宗学科の教授で、今年で五十八歳ということで、私よりは十歳くらい先輩の先生でいらっしゃると思います。先生はいつも飄々として飾らない雰囲気です。じつは心の中ではいろいろと考えをめぐらしておられて、真宗学科のこれからのことについても、あるいは学内の様々な動きについても、しっかりとした見識をお持ちの先生でいらっしゃいました。文学部で教務主任などの要職をつとめられ、その後、農学部の上げのタイミングで農学部に移されましたが、その時も学部運営にいろいろとご尽力をされたとお聞きしています。

また私にとっては、大変優しく接していただいたという思いがあります。定例の会議の後、その会議では終わってから教員同士でいろいろと相談や雑談をするのですが、そういった時、私はポツンと一人でいることが少なからずありまして、それは決して私に友達がいなかったかそういうことではないのですが、そうして一人でおりますと、杉岡先生が私に、先生調子はどうですかとか、いろいろ言葉をかけてくださるのです。講師控室で一緒になったときもそうでした。そういうさりげない気遣いをいつもかけてくださる先生でした。

皆さまご存知のとおり、その杉岡先生が、今年の二月二十四日にご病気でお亡くなりになりま

した。以前から内臓のご病気を抱えておられて、ご入院されることもありました。先生はあまりご自分からご病気のことを仰いみせんでしたが、一昨年（一九九〇年）の六月のご命日法要のご法話では、突然出血されて救急車で運ばれたという話をされておられて、やはり大変なご病気をお持ちなのだとそこで改めて思ったことでした。しかし、まさかこんなに早くお別れをすることになるとは考えてもおりませんでしたので、今でも信じられない思いです。突然ぽっかりと胸に穴が空いて、まだその穴がどうにも埋まらない、そんな感覚を持ちながら日々の業務をしているようなことです。

三月二十八日には、ここ大宮学舎の本館で「杉岡孝紀教授 追悼の集い」が催されました。皆さまの中にも参加された方がおられると思います。杉岡先生の奥さまもご出席くださいました。その日は、今日の法要で調声をしてくださった鍋島先生がご法話をしてくださり、またその後の清和館でのお茶会では、先生の門下生の方々が先生との思い出を語ってくれました。

さて本日のご命日法要ですが、この度は杉岡先生がこれまでになされてきた真宗学のご研究の一端を私なりに振り返らせていただきました。そのご研究を通して先生を偲ばせていただこうと、このように思っております。

杉岡先生の講義を後任して

実は私は今年度、杉岡先生が担当される予定であった演習の講義を一つ、代わりに担当させてもらっています。私以外にも何人かの先生が同じように杉岡先生の担当予定であった講義を持たれています。私は実践真宗学研究科二年生の宗教実践演習という演習を担当させてもらうことになりました。この演習のシラバスは杉岡先生が書かれたもので、担当者だけが私に代わっています。

それで先生方や事務の方が、履修予定であった学生さん一人ひとりに「急遽このようなことになったけれども、演習の選択はどうしますか？」と意志を確認しまして、それで何人かの学生さんは「そういうことであれば」と、他の先生の演習に変更することになりました。しかし、一人の学生さんだけが「やはり、杉岡先生がシラバスに書かれたあのテーマを学びたい」ということで、私が代理で担当する演習を選んでくれてまして、それで今は毎週その学生さんと二人で演習をやっております。

その杉岡先生がシラバスに書かれたテーマというのが「真宗他者論」というものであります。

そして杉岡先生はこのテーマに関して、ここ何年かで三本論文を発表しておられますので、演習では毎回、それらの先生の論文を読みながら、いろいろと二人で議論をしております。

それで今日はその「真宗他者論」ということ、この言葉は杉岡先生が作られた造語といつてよいと思いますが、その真宗他者論ということについて、あまり詳しいことまでは申し上げられませんが、杉岡先生の考えておられたことを少しでも皆さまと共有させていただければと思います。

杉岡先生の問題意識

さてこの「真宗他者論」というテーマには、杉岡先生の問題意識が強く込められておりまして、それがどういふことかと言いますと、まずそもそものは、これまでの真宗学においては「他者との関係性」ということが見過ごされてきたのではないか、ということです。ご存知の通り浄土真宗の本尊は阿弥陀如来一仏でありまして、その信仰は阿弥陀如来と私との一對一の関係ということが一番の根本です。

それは勿論のことなのですが、しかしそれだけではなく、あらゆる諸仏や菩薩たち、天の神や

地の神なども親鸞聖人の信仰の中には位置づけられていますし、また自分を導いてくれた方々、先立っていかれた方々との関係なども、やはり大切なものとされています。さらには異なる考え方や信仰の人々との関係性ということも、親鸞聖人が現実の生活のなかで考えを巡らされたことでした。そしてそうした様々な関係性こそが、私たちの生活あるいは生き方に影響し、そのあり方を方向付けていくのだと。

杉岡先生は、そうして考えてみたとき、近代の真宗学というものは「少しスッキリとしてしまっている」と表現されています。その要因の一つとして、先生はキリスト教とくにプロテスタント神学の一神教的な信仰をモデルとしたことを挙げておられますが、ともあれ、阿弥陀如来と私という関係性がもちろん信仰の中心であるわけですが、それが全てのように捉えることで、その他の私たちを取り巻く様々な存在との関係性というものが捨象されがちになっているのではないか、と言われるわけにあります。

他者の他者性

今申しましたように、杉岡先生は真宗学のなかで他者との関係性ということを改めて対象化してみるべきだ、そこから具体的な生き方・実践を考えていくべきだと仰っているわけですが、その際に一貫して大事にされている視点があります。それは「他者は私が決して理解することのできない存在である。その理解できないという事実を無視して、勝手に自分のなかで理解したつもりになるならば、それは相手の独自性を抹殺することであり、それは暴力に他ならない」ということです。

この「他者は私が決して理解することのできない存在だ」ということを「他者の他者性」と言うそうでありまして、つまりその「他者の他者性」というものを廃棄するなら、それは暴力につながるのだということです。そもそもこのような視点は、ナチスのホロコーストを経験したフランスのユダヤ人哲学者エマニュエル・レヴィナスが、他者論というものを提起して言われたもので、杉岡先生はそうした真宗学以外のところからも広く学びながら従来の真宗学のあり方を見直そうとされているということになります。

杉岡先生の言われるところはなかなか難しく、私も毎週学生さんとあだこうだと議論しているところでありまして、今日はご命日法要にお越しの皆さまをその難しさに巻き込んでしまつて少し申し訳なく思いますが、しかし杉岡先生がお書きになったものをじっくりと読んでいきますと、飄々とした杉岡先生の内心にあつた真宗学に対する真摯な思いが伝わってくるように感じます。

さて、この他者の他者性を廃棄することは暴力につながるということに関して、私の経験の中でいささか思い当たるところを振り返ってみますと、何年か前の演習の授業でしたが、ある学生が毎回遅刻してきまして、それで最初は私も穏やかに注意していたのですが、それでも度々遅れて入ってきて、しかも授業中もうつらうつらしていたりするもので、私もついつい厳しめに叱ってしまったことがあります。

それから一か月くらい経ってから、その学生と初めて一対一で話をする機会がありました。その時に、彼女は経済的に厳しい状況があつて、ほとんど毎日アルバイトをしているということ、家に帰るのはいつも夜中の十二時とか一時くらいで、そういう生活をしながら、なんとか授業料を払って県外の実家から大学に通っているということを聞きました。本人としては、相当一杯一

杯の状態で大学に来ていたのですね。

しかし私と言えば、その学生を私の中によくあるパターンにはめ込んで、「きつと遅くまでだらだらと夜更かししていたんだろう」とか、そんなくらいに決めつけてその学生を見ていたなと、その時気がついたわけです。もちろん、だからといって遅刻していいというわけではありませんが、もし私にもう少し想像力が働いていれば、同じ叱るにしてももう少し言い方が違っていたはずです。「私は相手のことが分かっている」という思いが相手を傷つけ、相手の声を抹殺していく、そうしたことに繋がってしまうということです。

決して他者を理解することはできないという認識は、一見否定的で、あまり生産的なことではないように思っています。しかし、心のどこかでこの他者の他者性に思いをいたすことが、逆説的ですが、相手の思いを受け止めていく可能性を開いていく。とくに宗教信仰は一面において、独善的な排他主義に陥りやすい危険性を孕んでいる。浄土真宗はそこを省みながら、具体的な事柄に対応していかねばならない。杉岡先生はそういうことをおっしゃっているのであらうと、私は理解しております。

他者性を受け入れる

今思い返しますと、杉岡先生ご自身がまさに、そうした暴力性に敏感な感性と、他者性を受け入れる優しさを持った先生であつたなと思うのです。

一つ思い出すことがあります。毎年、真宗学科では二年生の後期に、来年度のゼミを選択するための説明会が開かれます。ゼミを受け持つ先生方が「来年度の私のゼミはこういうゼミです。ですから、こんな人に来てもらいたいと思っています」といったように説明をして、学生さんはその説明をもとに、希望のゼミを選択するわけです。

その時、杉岡先生は学生にこんな話をされました。

「真宗学科に入ったけれど真宗学が分からない、真宗学が面白くない、そう思っている人は私のゼミに来てください。」

私はそれを聞いてびっくりしました。普通は逆ですよ。『私のゼミはやる気のある人じゃないと、入ってから困ることになりますよ』。さすがにそんな言い方はしないまでも、多かれ少な

かれ、そうしたニュアンスを醸し出すものです。しかし、杉岡先生は全く逆のことをおっしゃったわけです。

今から考えると、そこには、大学の論理・教員の論理だけで話を進めていいのか、学生には学生の思いや事情がある、こっちの物差しでは捉えきれないものを持っている。そういう学生の思いや心の声も受けとめてやるべきではないか。私の想像ですが、杉岡先生はそういうことを考えておられたのではないかと。そしてそれは、まさに他者の他者性ということを認識し、そこに耳を傾けることであつたように思います。

おわりに

時間がまいりましたので、話を結びたいと思います。杉岡先生の真宗他者論は、いろいろと多岐に亘る広さをもっており、真宗学の専門的な議論に関わるものですから、当然そのすべてを紹介できたわけではありませんが、ともあれ問題意識の一端はお伝えできたのではないかと思います。

とくに他者の他者性を対象化すること、それは裏返して言えば、私自身の愚かさを対象化するということでもあらうと思いますが、それは、自分は分かっていると自己完結してしまうあり方ではなく、他者の声を聞き続けるという、外に開かれたあり方を志向するものと言えます。そういう開かれた仏教・真宗のあり方というものを、杉岡先生は提起してくださったわけです。今日はそのことを皆さまと共有させていただこうと、お話させていただきました。どうもありがとうございました。

(二〇三三年十二月十五日 お逮夜法要)

中学生・高校生と仏教を学ぶ中で教えられたこと
私の立脚地は何処か・共に苦悩し、問う

近藤義行

(京都女子中学校・高等学校宗教科非常勤講師・漫画家)



近藤 義行 (こんどう よしゆき)

- 1984年 富山県 出身
- 2011年 東海大学大学院人間環境学研究科人間環境学専攻修士課程修了
- 2016年 龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻修士課程修了
- 2016年 京都女子中学校・高等学校講師（～'17年）
- 2017年 清風南海中学校・高等学校講師（～'18年）
- 2018年 鎮西敬愛中学校・高等学校非常勤講師（～'20年）
- 2018年 筑紫女学園中学校・高等学校非常勤講師（～'20年）
- 2022年 京都女子中学校・高等学校非常勤講師
- 2022年 龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程

【著作】

『ヤンキーと住職』(KADOKAWA '23年)

「仏教をテーマにマンガを描く中で知らされた可能性と危うさ」

(親鸞仏教センター『anjali アンジャリ』WEB版2024年3月1日更新号 '24年)

など。

讃題

【礼讃文】

人身にんじん受けがたし、今すでに受く。仏法聞きがたし、今すでに聞く。この身こんじん今生こんじょうにおかつて度どせずんば、さらにいずれの生しょうに向かつてかこの身を度せん。大衆だいしゆもろともに至心ししんに三宝に帰依したてまつるべし。

みずから仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して無上意をおこさん。

みずから法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、ふかく経蔵に入りて智慧海のごとくならん。

みずから僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して一切無碍ならん。

無上むじょうじんじん甚深微妙しんみょうの法は、百千万劫にもあい遇うことかたし。われ今見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

どうもこんにちは。ただいま拝読いたしましたのは礼讃文というご文です。三帰依文ともいいます。仏教学者の大内青繼おおうちせいらいが、『華嚴經』を中心にして、『法句經』・『開經偈』を組み合わせて作った文章で、宗派の垣根を超えて読まれています。

最初の部分を簡単な言葉に意識しますと、

「人間に生まれるということは非常に稀なことなのだ。

そして今、人間という命を生きている。

また、仏教の教えに出遇うことも非常に有ることが難しいことである。

そして今、仏教に出遇うことができている」

というような意味です。

ここには、仏教の「命の見方」、「命への自覚」が表されているように思います。

私たちはただ生きているのではなく、本当に深い命を生きています。仏さまは、私たちの命は何度も生まれ死にを繰り返してきた命なのだと説かれています。そして、生きることは簡単なことではありません。「何のために生きているのか」ということは、なかなか分かるものではありません。

ません。

このような、苦難を抱えた人生に見いだされてきたのが仏教という教えです。その仏教に出遇うこともまた難しいことです。しかし、有り難くも今、その教えに出遇えています。

仏教には、命に対する非常に深い見方があり、命への自覚の言葉があります。この言葉は本当に悲しみを知った人、本当に命の深さを知った人からしか出てこない言葉なのだと思います。礼讃文によって、大事な命を生きているのだということを思い出されます。

自分の立脚地は何か？

さて、今日の講題についてです。私は浄土真宗系の中学校や高等学校で宗教科の教員として働いてきました。その中で考えさせられたこと、出会ったことの一端をお話ししようと思います、このような講題を挙げさせていただきました。

皆さんは、何をご自身の立脚地としているのでしょうか。言い方を換えれば、何を自分であるとして生きておられるでしょうか。

先ほど拝読した礼讃文は明治十八年から読まれるようになったのだそうです。今から一三八年前です。そう考えると結構最近ですね。最初に読み出したのは東京大学仏教青年会の学生たちでした。みんなで読むのに良いお経はないかということで読むようになったのだそうです。

仏教青年会というのはサークルのようなものです。学部を超えて仏教を聞きたい学生が集まって、内外からお坊さんや仏教学者と呼んで仏教のお話を聞くといいクラブ活動です。

明治時代の東京大学は今よりもずっと入ることが難しかったそうです。それこそ、東大を卒業すれば良い仕事に就けるし、地位や名誉も得ることができる。社会で価値があるとされていることの多くが手に入る。それなのに、それだけで終わるのではなく東大の学生たちは仏教を聞いていました。それは、地位や名誉、学歴やお金を得ることでは間に合わないものがあるということなのではないでしょうか。

地位、名誉、学歴、そういうものはもちろん大事です。だけど、そういったものは人間の立脚地として、本当の根拠にはなりません。それが分かっていたから、東大の学生たちは仏教のお話を聞いたんじゃないか、と私は思っています。

その、「間に合わないもの」とは何なのか。それは生死しじゆうじの問題です。なぜ生まれてきたのか、何のために生き、何のために死ぬのか、そういうことは、地位や名誉や学歴があっても分かるものではありません。生死の問題を考える時には、地位や名誉や学歴やお金、あるいは健康、こういったものは全く間に合わないんです。だからこそ、東大の学生たちは「仏教を聞かないといけない」と集まって教えを聞いてきたんじゃないかなと思います。

とは言え、私自身が普段何を立脚地りつきゃくちにしているのかと考えた時、やっぱり地位だったり、あるいは肩書だったり、何ができるのかということを立脚地りつきゃくちにしているように思うんです。先生という立場であるとか、良い授業をすることができたということであるとか、こういうことを私は立脚地りつきゃくちにしています。

また、お坊さんだけが集まるような場所に行くと、他のお坊さんが勉強していないようなお経を勉強したとか、他の人がやっていない活動を私はしていると、そういうことを立脚地りつきゃくちにしていることもあります。

そういう自分を見つめたとき、「自分は一体何をしているんだろうか」と思いました。私には

「その場その場で、周りの人と自分との差を見て、自分が周りから仰がれるようなものになりたい」とか、「自分が役に立つものになったなら、そこで初めて自分の存在を認めていける」というような心があるのだろうと思います。

しかし、念仏の教えを聞くと、私のこういう心や考え方は胡散臭いぞということが聞こえてくるのです。地位や肩書や名誉や能力、そういうものを立脚地にしようとしてしまう私に問いかけてくるもの、光をなげかけてくるもの、それが南無阿弥陀仏の教えであると思います。

もしかしたら皆さんの中には、「地位、肩書、名誉、能力などの自分の外側にあるものを自分の立脚地にしたとして、そこに何の問題があるのか。別にいいじゃないか」と思う人も居るかも知れません。

私は、そういった自分の外側のものを立脚地にしてしまうと、本当の意味で人と出会うことができなくなってしまう。

無等に開かれる平等

安田理深^{やすだりじん}という先生は『信仰の実存』という本の中で「世間の中における自己ですから、それは自己じゃない。世間の中に自己が失われている」と仰っています。

たとえば、仏教を学ぶということでさえも、世間の中に生きる自分のためのステータスにして、そのステータスを立脚地にしてしまうと、自分が世間の中に失われてしまうのです。能力を立脚地にするということは、自分が取り換え可能なものになるということです。それでは、存在を尊重するということにはなりません。

曇鸞大師は『讚阿弥陀仏偈』の中で「無等等^{むとうどう}」ということをやっています。「無等等」について宮城顕^{みやぎしずか}という先生は、「無等の事実^{じじつ}に本来に明らかになるところに開かれてくる平等性^{びやうとうせい}」（『このことひとつ』という歩み 唯信鈔^{みぎのう}に聞く）と仰っています。

何か一つのことが出来たようになったら、一つ分の価値があるということではなく、無等というのとは一つ一つの存在そのものに価値を見えるという平等です。十把一絡げに全てを同じにしてみようじゃなくて、個々の存在の絶対性に頭が下がるということに開かれてくる平等です。宮城

先生は、「等しいものがない」というところに開かれてくる平等が無等等なのだと言っているわけです。この指摘は非常に大切なことだと思っています。

親鸞聖人もお釈迦さまも、肩書で人間を見ない方でした。阿弥陀如来が私に呼びかける時、それは私に呼びかけてくるんだけれども、同時に十方衆生、他の多くの等しく悲しみを抱える存在への呼びかけなのです。

全ての人を平等に見る世界

親鸞聖人の『唯信鈔文意』にはこういう言葉があります。

「ひとすちに具縛の凡愚・屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信楽すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。具縛はよろづの煩惱にしばられるわれらなり。

(中略)

れふし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり。」

〔『唯信鈔文意』／『浄土真宗聖典―註釈版―』七〇七頁・七〇八頁〕

親鸞聖人は、生きとし生けるもの全てが阿弥陀如来の救済対象であると見られました。世間では人間を階層的に分類しますが、本願の教えに照らされて明らかになるのは、聖人も凡夫も等しく煩惱から離れられない身を生きているという事実です。

また、このご文に書かれてある「れふし」、「あき人」というのは、鎌倉時代に蔑視されていた人々です。そういった背景があつて、親鸞聖人は「れふし」も「あき人」も、さまざまなものは「われら」なのだと仰るのです。

念仏を通して無限なる世界、量ることのない世界に触れることで、相対的な人間の肩書に依存せず、全ての人を平等に見る世界が教えられます。親鸞聖人は、その教えの中で如来の智慧の言葉聞き、如来を仰ぎながら現実を生きていかれました。それがこの「われら」という言葉に現れています。一人ひとりが仏になるものであると仰いでいかれたのです。

仏さまが言うのは「念仏をもうしてくれ」という、それだけです。全く無条件に、仏からこち

らが仰がれているのです。

そうしたものに触れた時、無条件に一人ひとりを仰ぐことのできない自分の悲しさが知らされます。如来から見たらどの命も等しく尊い命です。どちらの方が価値があるとか、能力があるとかという見方は真実に反した痛ましい見方なのです。南無阿弥陀仏と念仏するたびに教えられます。

存在の尊重のない社会

ここで、少し話題を変えたいと思います。

先日、授業で生徒たちにアンケートを取りました。授業の感想とか、最近どんなことで悩んでいるかとかについて書いてもらいました。

悲しいことに一番多かったのは「忙しすぎる」という回答でした。毎日、忙しくて自分の好きなことをしたり考える余裕がない。大人の社会も非常に忙しくなっていますが、高校生も大人以上に忙しいと感じているのです。

そのアンケートに一人、非常に印象に残ることを書いてくれた生徒がいました。ちょっと読ませてもらいます。

「人間の汚さに、嫌になることが最近多い。人を殺したり、冷笑したり。権力者が特定の教団と結託して誰かの人生を壊したり、自分が嫌なことをされるよりも悔しいし、腹立たしい。なぜ、罪のない人が殺されたりするのか。理不尽だと思う。最近ずっと、そういうことを考えている。」

これを読んで、私はもう押し黙る他ないというか、とても重たい言葉だと感じました。私自身が、「先生自身の生き方はどうなっているんですか」と問われているようにも思います。この生徒は、非常に真摯に現代と向き合っている。大切なことに目を凝らそうとしている生徒なのだと思います。

私たちは、この生徒に何を伝えてあげられるでしょう。皆さんでしたらこの生徒に何を言ってあげたいですか。そういう問いを中心にして後半のお話をさせていただきたいと思います。

この中で彼女は「自分が嫌なことをされるよりも…」と言っています。なぜそう思うのでしょうか

うか。もちろん、実際のところは彼女じゃないと分かりませんが、私はここから「人間を尊重せよ」という叫びが聞こえてくるように思います。人間だけではなく「存在を尊重せよ」ということです。存在が尊重されない世界を生きることの苦しさや痛ましさというものがここにあると思います。

そして、私がこの生徒に言いたいのは「世界の見方は一つではない」ということです。

確かに現代社会では、人間を人間とも思わないような事件が多発しているように感じられます。例えば今年のジャニーズ事務所の事件のように、芸能界で立て続けに起こっている人権侵害にも根底には同じ問題があるのだと思います。その人の存在を尊重しない、尊重できない、尊重を欠いているという問題です。これは重大な人権問題ですから、社会問題として一人ひとりが取り組んでいくべき大事な課題です。

おら、人間ぞ！

人間はずっとこの問題に苦しんできました。常に絶望しながら、それでも声を上げ、存在を尊重してきた人たちがいます。私たちはその人たちの歴史から学んでいかなければいけないんじゃないでしょうか。

最近、新聞記事で読んだ言葉が非常に響いてきましたのでご紹介いたします。水俣病事件についてずっと活動してきて今も発信し続けている、漁師で作家の緒方正人さんの「おら、人間ぞ！」という言葉です。

「水俣病事件は人が人を人と思わなくなった時からはじまった。（中略）人が人と人として出会いたい。それは命の要求です。」

『人間といのちの相』（第五巻）

これは、先ほどの生徒の質問とも響き合うものがあると思います。水俣病事件や緒方正人さんのことをご存じでない方もおられるかもしれませんので、ご紹介いたします。

チッソという会社が汚染水を水俣湾の海に流しました。その中に有機水銀が入っていて、それが原因となって多くの人が病気になるたり亡くなったりしました。そして、人が亡くなってからも汚染水は垂れ流され続けました。今でも水俣病で苦しんでいる方がたくさん居ます。

緒方さんは六歳の時にお父さんを水俣病で亡くし、自分自身も水俣病患者です。水俣病は当時まだ原因不明で、奇病と呼ばれて恐れられていました。緒方さん一家は非常に激しい差別にあつたそうです。

そして、大人になった緒方さんは父の敵を討つためにチッソに対する補償を求める運動に取り組んでいきます。ところが、そこでもまた差別を受けます。「あいつは金目当てじゃないか」と言ってくる人がいたりして、水俣は分断されていきました。結局、緒方さんはその補償を求める運動からも抜け出しました。

補償を求める運動は大事です。しかし、緒方さんは、本来お金の問題ではなかったはずの問題がお金の問題にすり替えられて、そのシステムの中に自分が取り入れられているように感じたんです。緒方さんはそこに課題意識を持たれました。これはお金の問題ではなく命の問題であると

して、人間として一人ひとりがこの罪に向き合っていかなければならないと仰っています。

人間としての責任

水俣病事件の責任はチッソや国にあります。緒方さんに責任は全くありません。しかし、緒方さんは「人間としての責任が私たちにもある」と言います。現代社会というシステムの中で生きている一人として、チッソや行政の人と一緒にあって責任課題を共有しないとけないと言っているんですね。

緒方さんは『人間といういのちの相』（第五巻）でこう仰っています。

「水俣病事件の根源に、人間の罪がある。（中略）

人間は今まで何をしてきたのか。いのちをいのちとも思わず食い散らかしてきただけではなく、魚やたくさんいのちのすみか、寝床である海に毒を撒いた。（中略）

殺された多くの人や動物、鳥のいのち。償いきれない罪の重さを感じるので。人間の罪で

す。原発でも被爆をしたのは、人間だけではない。海に生きるいのちも山に生きるいのちもみな汚染されてしまいました。彼等は保証金を受け取りません。どう償うというのです。」

「おら、人間ぞ！」という叫びは、ちゃんと人間として、チッソや政治家、行政の人に罪と向き合ってもらいたい、また自分自身もこの罪と向き合っていきたいという叫びです。システムの中の一人ではなく、一人の存在として人間を尊重しようという叫びです。

もやい直し

そこから、緒方さんは「もやい直し」という対話と協働に取り組んでいきます。一人でチッソの会社の前に座り込んで、あれだけ恨んでいたチッソの社員一人ひとりに、人間としてこの問題に向き合おうと声をかける活動をしました。

チッソに父を殺され自分自身も差別に合い、絶望し切った緒方さんでしたが、「人間とは何なのか」ということから考え直し、自分と、そして水俣病事件の根底にある「人間の問題」に向き

合っていったんです。

このような緒方さんの生き方を聞くと、私自身の生き方もまた問われてきます。

悲しいことに人類の歴史には、どんな場所でもどんな時代でも、人間を人間扱いしないという悲しみがありました。しかし、そこで人間や命の問題と真向かいになってきた人たちがいました。その人たちは必死に考え、誠実であらうとしてきました。私たちが学ばなければならないのは、人間や命の問題と真向かいになってきた人たちの歴史なんじゃないでしょうか。

そして、改めて先程紹介させていただいた生徒の問いに思われるのは、現代に生きる私たちには、存在として尊重し、尊重されるということが非常に分かりづらくなっているのだと思います。常に、能力や価値で図られ、存在を尊重するということが分からなくなってしまっている。だけど、本当は誰もが尊重されたいし、尊重したいんじゃないでしょうか。誰もが、自分を尊重し、全ての存在を尊重したい。

私を尊重している如来

親鸞聖人の和讃わさんにはこうあります。

無明むみょう長夜じやうやの灯炬とうこなり　　智眼ちげんくらしとかなしむな
生死しじう大海たいかいの船筏せんぱつなり　　罪障ざいしょうおもととなげかざれ

『正像末和讃』／『浄土真宗聖典―註釈版―』六〇六頁

無明というのは人間の苦しみや悩みの根本的な原因です。我欲に囚われて、苦しみを超える智慧を全く持たない人間の心を指す言葉です。私たちの現実の姿、暗闇あんぐの中を倦ねながら生きる私たちの実感を、無明常夜という言葉で表現されています。

その人間の愚かさをずっと見つめ続けてきた教えがあります。私たち人間は愚かさを避けることができません。だからこそ、人は自分の人生において灯火ともしびとなる存在が大切であることを思い知るのではないのでしょうか。人間の愚かさをずっと見つめ続け、そこに光をなげかけ続けてきた

灯火がある。その灯火に出遇うことができたからこそ、親鸞聖人はその言葉が自分自身、そして人々の灯火となることを願い、言葉を書き続けたんじゃないでしょうか。

教えの言葉が灯火なのです。自分自身は真つ暗だけれども、そこを照らし出す灯火がある。それを頼りにするんです。灯火は握ることはできません。ただ照らします。どんな人間も選ばず、どんな注文もつけない、平等な灯火です。

誰もが平等に救われていく願いに帰依しなさいというのが、如来からの呼びかけです。如来の方が、迷いの人間を尊重しているのです。

そう教えられた時に、自己をも厳粛な存在として尊重していきたい、他者をも仏になっていく存在として尊重していきたい、そういう願いが生まれてくるのかもしれない。

ずっと迷ってきた存在を見捨てず、迷ってきた存在そのものを尊重し、いたむものがある。それが如来です。

私を救うのは如来のお仕事です。私たちの仕事は、その灯火に照らされ、まなざしの言葉に教えられ、ともに迷い考えるということなのではないでしょうか。

間違ったら立ち止まることです。もし間違ったら、もう一度やり直すということが大切です。

仏教の授業は、人間の暗さや問題について「悲しみがあってもいいんだ」「ネガティブでもいいんだ」「暗くてもいいんだ」と暗さや問題を許せる時間であるべきだと思っています。そこでもともに迷いながら問うていく、そういう場所にしていくことが大切だということを聖教の言葉、それから生徒たちの言葉に教えられ、考えさせられました。

今日のお話はここまでにしたいと思います。最後に一緒に、お念仏をしてこの場を閉じたいと思います。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

ありがとうございました。

二〇二三年十一月十六日 ご命日法要 大宮学舎

仏教から結婚式の意味を問い直す
～結婚式はもっと自由でいい～

田坂亜紀子

(瑠璃庵 ～le lien～ 代表取締役 本願寺派布教研究専従職員)



田坂 亜紀子（たさか あきこ）

山口県岩国市 出身

2005年 龍谷大学文学部哲学科哲学専攻卒業

2014年 ウェディングプランナー資格取得

2022年 仏前結婚式専門プランニング会社瑠璃庵～le lien～設立

讃題

ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の淨信、億劫にも獲がたし。
たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。

『顕浄土真実教行証文類』総序／『浄土真宗聖典―註釈版―』一三三頁

皆さまこんにちは、田坂と申します。私は瑠璃庵るりあんという仏前結婚式専門の会社を立ち上げ、ウェディングプランナーをさせていただいております。

実は、龍谷大学は私の母校でございます。学生時代は伝道部という部活に所属しております。その時には深草学舎の顕真館でご法話をさせていただく機会がございました。龍谷大学でお話しさせていただくのはそれ以来で、もう二〇年ほど経ちます。

今日は久しぶりに龍谷大学でお話しをするということで、大変緊張しておりますが「仏教から結婚式の意味を問い直す ～結婚式はもっと自由でいい～」と題しまして、仏前結婚式についてのお話をさせていただきます。

結婚しなくても幸せになれるこの時代

昨今、結婚式を挙げられる人の割合は随分少なくなっています。マイナビウエディングが二〇二二年の六月を起点にして過去一年間を調査したものによると、ご結婚された方の中で結婚式を挙げられた方の割合は四五・五%でした。つまり、全体の半分以上の人しか結婚式は挙げておられないということです。それには、いろいろなご事情があると思います。

最近では、結婚式をしないで結婚することを「ナシ婚」と言ったりするようです。また、最近増えてきているのが「フォト ウェディング」という形態です。式は挙げないけれど、衣装を着て写真だけは撮りましょうというのがどんどん増えてきています。

昔は、「結婚ってというのは、皆がするものだ!」という、何となくのプレッシャーのようなものがありました。しかし、時代は変わりました。結婚情報誌である『ゼクシィ』が二〇一七年に出したCMでは「結婚しなくても幸せになれるこの時代に、私は、あなたと結婚したいのです」というキャッチコピーが流されました。私はそれを聞いて、良い言葉だなと思いました。

結婚ということ自体が、人生の進路として必ずしも選択しなければならないことではなくなっ

てきたのです。結婚式も別にしなきゃならないものではなくまりました。仏教に聞いて言えば、お葬式も最近はやつとそんな雰囲気がありますね。別にしなきゃならないわけではない。じゃあ、何をするのか？

「体感」の大切さ

私は結婚式を挙げる意義は「体感すること」にあると思っています。経験しながら体感していくことに意義があります。ですから、結婚式には「挙げてみないとわからない」というところが結構あります。

今日は、体感を皆さんと共有できればと思い、一つの物語を紹介したいと思います。

『ふたりはともだち』という絵本のがまくとかえるくんのお話です。このお話は小学校の国語の教科書に載っていますので、学部生の人は読んだことがあるかもしれません。『ふたりはともだち』という絵本に収録されている「おてがみ」というお話です。

このお話に登場するがまくんとかえるくんは、とっても仲良しの親友です。

ある日、がまくんがものすごく悲しい顔をしていました。そのことに気がついたかえるくんが「どうしたんだい」と聞きます。すると、がまくんは

「今が一日の中で一番悲しい時間だ」

と答えます。悲しい時間とは、郵便屋さんが来る時間のことです。がまくんは今まで一度もお手紙をもらったことがないので、毎日この時間になると悲しくなるのだと言うのです。

それを聞いたかえるくんは少し考えて、

「僕、用事を思い出したから、家に帰るね」

と急いで家に帰ります。そして家に帰ったかえるくんは、紙に「親愛なるがまくんへ」と書きます。書き終えたらそれを封筒に入れ、かたつむりくんに託します。

「ねえねえかたつむりくん、がまくんの家の郵便受けにこのお手紙を届けてきてくれないかい？」

「まかせてくれよ。すぐやるぜ」

かたつむりくんは快く引き受けてくれました。これで手はずは整いました。

かえるくんはがまくんの家に先回りします。その頃、がまくんはふてくされてお昼寝をしていました。かえるくんはがまくんを起こそうとします。

「ねえねえがまくん、起きて起きて　もしかしたら今日はお手紙が届くかもしれないよ」
でも、がまくんは「届きやしないよ」とふてくされています。かえるくんは、

「いやいや、今日こそは、お手紙届くかもしれないよ」

と言うのです。さすがにがまくんも不審に思いました。

「かえるくん、さっきから窓の外の郵便受けの方ばかり見てどうしたんだい　何度も言うけどお手紙なんか来ないよ」

するとかえるくんは、

「いや、お手紙届くよ　だって、僕がお手紙書いたんだもの」

と、なんと自分がお手紙を書いたことをバラしてしまいました。

がまくんは「ええ!」と驚きながら

「お手紙になんて書いたの?」

と聞きます。そうすると、かえるくんは

『親愛なるがまくんへ 僕は君が僕の親友であることをうれしく思っています 君の親友か
えるより』、こう書いたんだ」と、なんとお手紙の内容までバラしてしまいました。

さあ、ここでちょっと皆さんにクイズを出します。

「かえるくんのお手紙の内容を聞いたがまくんが発した初めの一言は何だったのでしょうか？」
当てませんのでちょっと考えてみてください。もし、自分ががまくんだったら何と言いますか。
ちなみに、ある初参式で同じ質問をさせてもらったことがあります。ご家族のお母さんは、

「私だったら『嬉しいよ』って言うかな」

と答えてくれました。お父さんの方は、

「僕だったら『ありがとう』って言いたいな」

と答えてくれました。皆さん、自分だったらどう言うか、思い浮かびましたでしょうか。

それでは正解です。正解は、

「ああ」

でした。「ああ」と言った後に、「良い手紙だ」と言いました。

私はこの「ああ」がなかなか深いと思うのです。きっとがまくんは、「ああ」と言った時に、いろんな思いが駆け巡ったのだと思います。でも、そのいろいろな思いはまだ言葉にならなかったのです。言葉になる前の、言葉が追いつく前の気持ち「ああ」とこぼれ出てきたのです。この「ああ」とこぼれるような経験は、皆さんもこれまでの人生の中であったのではないのでしょうか。私はこのように「ああ」ってこぼれるような経験が、人生をとてもありがたいものにしてくれるのではないかと思います。

言葉より前にこぼれる「ああ」

実は、浄土真宗をお開きくださいました御開山である親鸞聖人もまた、「ああ」と仰っています。

ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。

たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。

（『顕浄土真実教行証文類』総序／『浄土真宗聖典―註釈版―』一三三頁）

親鸞聖人は阿弥陀如来という仏さまの救いに出遇い、その願いを聞き訪ねていかれました。この救いに出遇うことがどれほど有り難いことであったのか、この命がどれほど仏さまの側から願われてあったのかと知らされた時、親鸞聖人は「ああ」という心を表してくださったのです。「ああ」とこぼしてくださったのですね。

私は、親鸞聖人から「仏教に出遇うということは『ああ』とこぼれるようなことなのだ」と教えていただいているように思っています。言葉になる前の思い、「びっくりした」とか「感動した」とか「嬉しい」とか「有り難い」とか、時には「悲しい」というのもあるかもしれないけれど、そういった「言葉」が追いつくより先に「ああ」とこぼれるような経験が、私たちの人生を彩ってくれているのではないのでしょうか。

私は、仏前結婚式を通して、この「ああ」とこぼれる体感をお届けしたいと思っています。仏前結婚式を通して、自分自身の人生に向き合い、「ああ」というものに出遇っていただけなら良いなと思っています。

いろいろな仏前結婚式

仏前結婚式と一言で言いましても、いろんな結婚式があります。こうしなければならぬという決まりはほとんどありません。仏さまを仰がせていただき執り行われる結婚式であれば、それは仏前結婚式であると言えます。

仏前結婚式の例を挙げますと、まずお寺であげられる結婚式があります。

こちらのお二人は国際結婚をされたお二人です。この新郎さんのご両親はアメリカから駆けつけて参列しておられました。新郎さんのご両親はお父さんとお父さんです。私は初めてそういうご家族に出会いましたので、ちょっとびっくりしました。「こういう家族の形もあるんですね」と言うと、「アメリカじゃあ、もう普通のことですよ」と返されて「それもそうか」と、思いました。



仏前は誰が座っても良い場所ですから、どなたでも結婚式を挙げる事ができます。どなたでも祝福されて良いというのが仏前結婚式です。そんなことを教えていただいた結婚式でした。

そして、こちらは京都の顕道会館で行われたテクノ法要での結婚式です。新郎新婦のお二人が希望されたテクノ法要。お経とテクノ音楽を融合させ、プロジェクションマッピングを映し出し、その中で法要を勤めます。プロジェクションマッピングの光の中で阿弥陀さまが自由自在に動きます。「こんな結婚式もあるのだな」と私もすごく勉強になりました。

また、お寺ではなくて結婚式場を借りての結婚式もあります。しかし仏前結婚式はまだまだ珍しいので「仏前結婚式はうちではちょっと……」と断られる式場・ホテルもあります。そういう場合は、「こちらが全部持ち込みますので会場のみお貸しください」と交渉します。こんな感じ



で式場の中にご本尊を掛けさせていただいています。

こちらの結婚式では、新郎新婦のご実家がそれぞれに遠方のご家族でしたので、両家にとって中間あたりの場所で、お洒落な結婚式を挙げたいということで、式場を探しました。

また、コロナ禍では結婚式を諦めた方も随分おられました。そんな中、お家で結婚式を挙げた方もおられます。こちらのご夫婦はコロナ禍で結婚式を一旦諦め、その間にお子さんが生まれました。そして、ちょっと写真では分かりにくいですが、実はこの時新婦さんは、二人目のお子さんを妊娠して八ヶ月目でした。それこそいつ生まれてもおかしくない状況でした。そんな状況でも、お家であれば一番気兼ねが要りませんし、時間の制約ありません。もし苦しくなったとしても、すぐにお着物を解けば良いですから、そういう手軽さや安心感もあってお家でしょうということになりました。

このように、仏前結婚式にも、本当にいろんな形があります。



そして、実際に結婚式を挙げてみたら、皆さん「挙げて良かったです」と仰います。自分が想像していた以上の体感がそこにあったのです。

「ああ、私はこんなにみんなに支えられていたんだ」とか「ああ、自分のパートナーはこういうことを考えながらこれまで生きてきたんだな」とか、「ああ、今こんな気持ちで自分の中に芽ばえてきた」とか、様々な気付き・感動に出遇われ、「やっぱり結婚式を挙げてよかったです」と仰います。私は結婚式に携わらせていただく度に、結婚式という儀式のもつ力に驚かされます。人生の節目になる行事は沢山ありますが、その中でも、結婚式は当事者が主体になって準備をする儀式の一つです。

例えば、成人式やお葬式、入学式、卒業式もそうですけれど、節目になる行事というのは主に誰かに準備してもらって、主役が登場するという形態が多いですね。

でも、結婚式は基本的には主役が準備をします。人生の節目となる行事の中でも、こういう儀式はちょっと珍しいのではないかなと思います。ですから、いろんな準備をしていく段階から、結婚式を楽しんでいただきたいと思います。

結婚式を通して知る想い

私は結婚式を挙げるお二人に必ずヒアリングをさせていただきます。お二人がどういう人となりで、どんな出会いがあったのかということなどを聞かせていただきます。ヒアリングを重ねながら、自分自身と、またパートナーと向かい合っていく。そういう過程を大事にしています。

例えばこんなことを聞きます。

「あなたの好きな○○は何ですか？」

○○に入るのは「音楽」でもいいし「映画」でもいい。「雑誌」でも、「色」でも、「花」でもいいです。そして、答えてもいいし答えなくてもいい。こう聞かれて答えがスツと出てくる自分なのか、ちょっと考えてもなかなか答えが出てこない自分なのか、そんなことに気づくこともあるでしょう。また、「あなたが尊敬する人は誰ですか？ その人のどんなところを尊敬していますか」と聞くこともあります。普段の日常の中ではあまり立ち止まって考えないようなことかもしれない。こうしたことを聞き合いながら、自分のパートナーがどんな個性の持ち主なのか、どんな人生を歩んできたのかなど、改めてお互いを再認識していきます。

私の夫は、私の母から私も知らないような私の小さい頃の話聞いて、何かちょっと嬉しかったなんていう話をしてくれたことがあります。ある時、母が「あなたが小さい頃、お人形が家にいっぱいあったけど、あれはなんで知ってる？」って言うのです。「あなたが中耳炎になって大変だった時に、病院に行くたびに大泣きするから、病院に行く度におじいちゃんがお人形を買い与えていたんだよ」という、そんな話でした。私の記憶には一つも残っていませんでしたけど、そういう話を聞いて夫は「ああ、あなたはそういう人生を歩んできたのか」と思ったそうです。こういうことを結婚式を準備する過程で知っていくというのも、大事なことだと思います。

もちろん、中には向き合いたくない自分に出会うということがあるかもしれません。無理に向き合う必要はありませんが、自分の人生の一コマとして触れていただきながら、またそれを通してお互いを見つめ合っていただくといいです。そうすると、結婚式がより一層味わい深いものになっていくのではないかと思います。

こんな風に、新郎新婦さんと一緒に式を作り上げていくことを大事にしながら、体感のある結婚式を挙げていただけたらと思います、活動しています。

二人の原点

最後に、少しがまくんとかえるくんの話に戻ります。

かえるくんががまくんの為に出したお手紙が、がまくんの所に届いたのは四日後のことでした。かたつむりくんは急いでくれましたが、それでも四日かかってしまったのですね。

でも、その四日間、がまくんはとっても幸せな気持ちでお手紙を待っていました。それはかえるくんが自分の為に心を込めてお手紙を書き、自分の為に一生懸命に走り回ってくれたことを知らされたからです。そして、そんなかえる君が、がまくんのそばでお手紙が届くまでずっと一緒に待っていてくれたからです。がまくんは、かえるくんのその気持ちがとてもうれしかったからこそ、これまでのように悲しい気持ちでお手紙を待つのではなくて、嬉しい気持ちでお手紙を待つことができたのです。

結婚式に携わらせていただいている私にとって、この物語はいろんな示唆を与えてくれます。結婚式はゴールではありません。そこからおふたりの生活が始まります。山あり谷あり、いろんな出来事が起こります。どんな形かは分からないけれども、必ず別れがやってきます。けれど

も、その時に「ああ、結婚式で、こんなことをしたな」と思い出せるような、結婚式が原点の一つになってくれたらなと思うのです。がまくんが「ああ」とこぼしたその出来事が、お手紙を待つ時間の味わいを変えていったように、おふたりの「ああ」がこぼれるような結婚式が、おふたりの生活を支えるものになりますように、そんな思いで結婚式に関わらせていただいております。

少しテーマからズレてしまったこともあったかも知れませんが、今日は仏前結婚式についてのお話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございます。肝要には、蓮如上人のご文章をお聞かせいただきましてお話の結びといたします。

二〇二四年一月十五日 お逮夜法要 深草学舎

仏教から読み解くアンパンマン
～浄土真宗の視点を中心に～

四夷法顕

（本学非常勤講師）



四夷 法顕（しい のりあき）

1985年生まれ、兵庫県出身。

龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程修了、宗学院本科卒業。専門分野は日本浄土教・真宗学。

龍谷大学非常勤講師、相愛大学非常勤講師、宗学院研究員、得度習礼所・教師教修所講師、毎日文化センター講師、浄土真宗本願寺派信行寺住職、本願寺派布教使、輔教、博士（文学）

【著書】

『立教開宗と浄土真宗』（単著／自照社／2024）

『仏教LIFE—宗学院論集別冊④—』（共著／宗学院／2023）

『智慧のともしび—顕証寺本蓮如上人絵ものがたり—』（共著／法蔵館／2020）

『親鸞と浄土仏教の基礎的研究』（共著／法蔵館／2020）

【論文】

「『往生要集』における三心積受容の意義」（『宗学院論集』第96号／2024）

「『本典』「教文類」における阿難観の一試論—〈無量寿経〉の引用形態を通して—」

（『龍谷教学』第56号／2023）

「初期叡山浄土教における悪人往生説と親鸞聖人の立場—善導教学の受容を一視座として—」

（『宗学院論集』第94号／2022）

「『本典』における般舟三昧思想の受容と展開」（『宗学院論集』第92号／2020）

「親鸞聖人と「浄土五会念仏略法事儀讃」—儀礼本から教義本への変遷—」

（『山口真宗教学』第30号／2019）

「天台教学を基礎とする親鸞浄土教の研究」（博士論文（龍谷大学）／2017）

ほか多数。

讃題

ただこのちかひありときき、南無阿弥陀仏にあひまゐらせたまふこそ、ありがたくめでたく候ふ御果報にては候ふなれ。

『親鸞聖人御消息』第四通／『浄土真宗聖典―註釈版―』七四三頁

ようこそお参りくださいました。

今回の「仏教から読み解くアンパンマン ～浄土真宗の視点を中心に～」という講題を出そうと思ったきっかけがあります。私には五歳の娘と一歳の息子がおりまして、二人ともアンパンマンが大好きなんです。ですから、私も子供と一緒にアンパンマンをテレビで見ることがあります。そうすると、「アンパンマンには、結構仏教的な要素があるものだな」ということに気付かされました。そのようなことから、本日はアンパンマンを仏教的な視点、特に浄土真宗の立場から読み解いてみたいと思います。

「アンパンマンマーチ」が問いかけるもの

こちらは「アンパンマンマーチ」の歌詞です。おそらく一度は聞かれたことがあるんじゃないでしょうか。

そうだ嬉しいんだ生きる喜び たとえ胸の傷が痛んでも

何のために生まれて 何をして生きるのか 答えられないなんて そんなのは嫌だ

アンパンマンは子ども向けのアニメですので、よく見ている層は小学生までの子どもだと思います。それにしても、非常に強いメッセージ性がある歌詞だと思います。

この世に自分の意志で生まれてきた人は、誰ひとりとしていません。性別も容姿も自分で選ぶことはできません。気づいたら生まれて、気づいたら年を重ね、最後には命を終えていきます。これが私たちの命のあり方です。

「何のために生まれて、何をして生きるのか」、私たちの存在の根拠となるものは一体何なのか、

ということをアンパンマンマーチは問いかけてくるような気がいたします。

人によっては、「この世界に生まれてきたのは社会的に立派な地位に就くため」という人もいるかもしれませんが。あるいは、「たくさんお金を稼いでお金持ちに成って、社会から評価されるために私は生きているんだ」という方もいるかもしれませんが。それらは人生の努力目標としては大切なものでしょうし、私はそのような価値観自体は否定しません。

しかし、地位・名誉・財産のようなものは、最終的には手放していかねばいけないものです。そういったものが、私にとってこの世界に生まれてきた意味となるのだろうか、私が生まれてきた意味はお金持ちに成る、あるいは立派な地位に就くためだと言えるのだろうかと考えた時に、私は、そういったものは自分自身の存在の根拠には成り得ないと思います。

方向性を与える宗教

「何のために生まれて、何をして生きるのか」、この問いかけに一つの方向性を与えてくれるのがまさに宗教であるといえます。宗教学の泰斗である岸本英夫氏は、

宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられているいとなみを中心とした文化現象である。

（『宗教学』一九六一年、十七頁）

と言われています。

人間として生まれてきた意味といったような究極的な問題に対して、人生の経験則から答えを出すことは難しいのではないのでしょうか。なぜ生まれ、いのち終わったらどうなるのかという、「人間の問題の究極的な解決にかかわり」をもつものが宗教である、ということを岸本氏は仰っているのだと思います。

逆転しない正義

アンパンマンが作られた背景には、原作者であるやなせ・たかしさんの戦争体験があります。

やなせさんは二四歳の時、第二次世界大戦で中国に出征します。やなせさんが戦争に行って一

番苦しかったのが飢えでした。その飢えに苦しみながらも、日本の正義を信じて戦ったのです。しかし戦後、信じていた正義が一変してしまうんですね。しかも、やなせさんの弟さんは戦死しています。

戦争中は、国のために命を捧げ、命を抛って戦うことが正義であり美德とされていました。ところが、戦争が終わるとその価値観が一変して、あれは間違いだったという風潮になっていく。「あの苦しみは何だったんだ、弟の命は何だったんだ」とやなせさんは思いました。価値観がまるで変わってしまった。そんな中で、やなせさんは「正義とは一体何なのか」ということを考えました。

ようするに、戦争には正義というものはないんです。しかも逆転する。

それならば逆転しない正義っていうのは、一体何か？

ひもじい人を助けることなんですよ。そこに飢えている人がいれば、その人に一切れのパンをあげるということは、A国へ行こうがB国へ行こうが、正しい行い。

だから、ごく単純に言えば、その飢えを助けるのがヒーローだと思って、それがアンパンマ

ンのもとになったんですね。

（『何のために生まれてきたの？—希望のありか—』二〇一三年）

やなせさんは戦争の時、空腹が一番つらかったと言います。その経験を元に「ヒーローとは一体何なのか」「正義とは一体何なのか」ということを考えた結果、ひっくり返らない正義としておなかを空かした人に食べ物を施すということに思い至りました。その行為をヒーロー化したのがアンパンマンなんです。

アンパンマンのヒーロー像

一般的なヒーロー像は正義のヒーローが悪い敵を倒していくというものです。この場合、敵は毎回変わります。正義が敵を倒す、すなわち善が悪を倒すという構図です。こういったヒーロー像が一般的なのだと思います。

一方で、アンパンマンの敵は毎回変わらずばい・きん・まんです。そして最後はいつも、アンパン

マンが「アンパンチ！」を繰り出して、ばいきんまんが「バイバイキーン」と遠くの方に飛ばされ、毎回バイキン城へと逃げ帰ります。これは通常のヒーローのように正義が悪を倒すところに、アンパンマンのヒーロー像が置かれていないということを示唆しています。

では、アンパンマンがヒーローたる所以はどこにあるのでしょうか。やなせさんは『明日をひらく言葉』という本で、次のように仰っています。

逆転しない正義とは献身と愛だ。

それも決して大げさなことではなく、眼の前で餓死しそうな人がいるとすれば、その人に一片のパンを与えること。

（『明日をひらく言葉』二〇一六年、一〇八頁）

つまり、アンパンマンのヒーロー像（正義）は、敵を倒し悪を排除していくということではなく、目の前でおなかを空かせている人にパンを分け与えるということに置かれているのです。

アンパンマンはおなかを空かせた人に自分の顔の一部であるパンを分け与えていきます。しか

も、パンを分け与えるとアンパンマンは力が出なくなります。それでも、とにかく目の前で困っている人に対してパンを分け与えていく。これは他者を慈しむということです。この他者への慈しみを、仏教では「慈悲」と言います。

慈しみ、施すというアンパンマンの行為によって、やなせさんは普遍的な正義を表されているのではないのでしょうか。

慈悲とは共感である

「慈悲」は仏教において非常に重要な徳目です。

「慈」はサンスクリット語で「マイトリ」という言葉で、「友情」や「親愛なる思い」という意味です。「悲」はサンスクリットで「カルナ」という言葉で、「哀れみ」や「同情」という意味です。この二つを合わせたものが「慈悲」で、他者の痛みに共感していくという心なのです。他者の悲しみや苦しみを、自分事として受け止めていく心を仏教では慈悲と言います。

また、「慈」は安らぎを与えることで、これを与楽といい、「悲」は苦しみを取り除くことで、

これを抜苦といいます。慈悲は抜苦与楽という働きをしていくものです。

親鸞聖人が尊敬されていた中国の僧侶に善導大師という方がおられます。この善導大師が著わされた『観經四帖疏』の中に、こういう言葉が出てきます。

諸仏の大悲心とは、苦しみ悩む人に焦点を合わせてはたらく心です。その心はひとえに煩惱の濁流に巻き込まれて、苦しみ悩んでいる人を憐れみ念じ、安らかな涅槃の浄土へ迎え取ろうと、はたらし続けています。

例えば、川の岸辺で遊んでいる子どもよりも、濁流に落ち込み、今にも溺れそうになっている子どもを、優先して救うようなものです。

（『浄土真宗聖典——七祖篇——』三一二頁 取意）

とあります。溺れている人を助けるがごとく、今まさに苦しみに喘ぐ人に焦点を合わせてはたらく心が慈悲なのです。

溺れている最中の人に、「看板に危ないって書いてあるのに、なんで川に入ったんだ」と叱責しないですよね。もちろん、今からその人に泳ぎ方を教えるような時間ありません。溺れている人がいたなら、真っ先に助けなさいけません。アンパンマンがおなかを空かせて泣いている子どもにパンを与えるのは、まさに仏教における慈悲の具現化であるといえます。

ばいきんまんの存在意義

では、正義が悪を倒すというところにアンパンマンのヒーロー像がないのであるなら、ばいきんまんの存在意義はどこにあるのでしょうか。先ほど紹介した『明日をひらく言葉』には、

ばいきんまんの登場によって、アンパンマンにもうひとつのメッセージが生まれた。「共生」だ。バイキンは食べ物の敵ではあるけれど、実は、パンだって酵母菌がないとつくれない。バイキンも、食べ物がないと繁殖できない。

つまり、パンとバイ菌は、敵だけれど味方、味方だけれど敵という共生関係にあるわけだ。

と、やなせさんは述べています。

アンパンマンとばいきんまんの関係は、通常のヒーローと敵のように、正義が悪を排除するという関係性ではなく、「共生」だと仰っているのです。

また、『アンパンマン大研究』というQ & Aの方式になっている本の中にこういった質問があります。

Q. アンパンマンは、ばいきんまんをやっつけるだけで、なぜ捕まえないのですか？

質問者は「結局、毎回ばいきんまんを退治するなら、とどめを刺したらいいじゃないか」と言っているのです。それに対してやなせさんは、

A. (やなせたかし)

アンパンマンとばいきんまんは、光と影、陽と陰、あるいはプラスとマイナスのような関係です。どちらか一人だけでは存在できません。お互いそのことをよく知っているのでしょうか。

（『アンパンマン大研究』一九九八年）

と答えています。

アンパンマンとばいきんまんの関係は、アンパンマンという善が、ばいきんまんという悪を排除するというものではないのです。両者はそれぞれの存在によって成立しており、これをやなせさんは「善と悪の共生」と仰っています。ここがアンパンマンと他のヒーロー像が異なるところです。

正義が悪を排除し、平和が訪れるという構図はよく描かれますが、アンパンマンはそこにヒーロー像が置かれていません。他者を助け、おなかを空かした子供にパンを分け与える。そういうところにアンパンマンがヒーローである所以があるのです。

また、この善と悪の共生ということは、「嫌いな人とも仲良くやっていきましよう」ということではありません。やなせさんは次のようなことも仰っています。

この世は善と悪、光と影でできています。

人の心にも善と悪の心があって、そのバランスがとても大事です。

（『明日をひらく言葉』二〇一六年、一二二頁）

つまりアンパンマンとばいきんまんは、この世が善と悪の共生によって成り立っていることを具現化したキャラクターなのです。また、それは人の心も例外ではありません。「みんな仲良くしましょう」とか「嫌いな人とも仲良くしましょう」という共生ではなく、この世界も人の心も、善と悪、光と影が共存している。それを表していくのがアンパンマンとばいきんまんなんです。

親鸞聖人にとっての善悪

では、親鸞聖人は善悪についてどう仰っているのでしょうか。親鸞聖人の門弟である唯円が、聖人の言葉をまとめたときれる『歎異抄』には、

聖人の仰せには、善惡のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。

〔浄土真宗聖典―註釈版―〕八五三頁

とあります。親鸞聖人は「一体、何が善で何が悪なのか分からない」と仰るんですね。

「これが善で、これが悪だ」とバシッと言い切るような言葉が有名になるなら分かるのですが、「分からない」という言葉が有名になっていく。それは、やはりこの言葉が本質をついているからだろうと思います。

また、同じく『歎異抄』に、

さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし

〔浄土真宗聖典―註釈版―〕八四四頁

とあります。

縁によってはどのような行いであってもしていくのが私なんだということです。自分という存

在は、善という縁がはたらいたら善人に成るかもしれないし、悪という縁がはたらいたら悪を犯すかもしれない。善人だから悪を犯さないわけではなし、悪人だから善をおこなわないというわけではなく、縁次第でどんな行いをもしてしまう危うい存在の私がいるのだということです。

つまり、善悪は時代や立場によって簡単に変わっていくものであり、「正義」ということの脆さを意味しています。「あの人はいい人だ」とか「あの人はちょっと嫌な人だ」とか、結局それは自分にとって都合のいい人が「いい人」で、自分にとって都合の悪い人が「嫌いな人」なのです。その究極が戦争で、それぞれの国が正義の名の下に争っているわけです。これも立場によってその正義は動いていきます。

実際、戦地に行っている人も家に帰ったらよき父であり、よき夫であり、よき息子なわけですが、ところが、その時代の状況によって、戦地へ行って人を傷つけなければならない。当然戦争はあつてはならないものですが、残念ながらいま現在でも世界では戦争が絶えません。

浄土真宗本願寺派の勧学であつた梯實圓和上は、

私どもは、善人と悪人といいますと、善人と称讃される人と、悪人と烙印を押される人とが

いるように考えがちです。しかし、実際この世を何年か生きた人ならば、何らかの罪を犯さずには生きることができなかったはずで、また何らかの善を行い、人びとに幸せを味わわせなかった人もいないと思います。(中略)

人は悪だけで生きられるものでもなければ、善だけで生きられるものでもないのです。ただ悪縁に逢う機会の多かった恵まれない人と、善い縁に逢う機会の多かった恵まれた人との違いは、ただそれだけではないでしょうか。ですからあまり簡単に善人・悪人というレッテルを人に貼るのは慎むべきでしょう。

(『親鸞聖人の教え・問答集』二〇一〇年、二二六頁)

と仰っています。私たちは常に善と悪の狭間で揺れながら生きている不確かな存在なんですね。

本当の慈悲とは

阿弥陀如来は、善悪の狭間で悩み苦しむ私に対して、生き方を説いたり罪を告げたりするよう

なことはしません。ただ二筋に障りのない救いを告げてくださっています。目の前で苦しむものに対して起こす本当の慈悲は、駆け引きではなく、まず救いを告げていくということです。

アンパンマンもそうです。おなかを空かしている子供に「じゃあ、今からここで腕立て伏せを十回やったら、パンをあげよう」と言うアンパンマンは嫌ですよ。ね。「これだけのことをやったら、これをあげよう」と条件をつけるのは駆け引きです。本当の慈悲は駆け引きではなく無条件です。今、目の前にいる人を救わずにはおれない。だからこそ、条件を告げるのではなく、無条件にあなたを救っていきましよう、そこに見返りを求めないのです。だからアンパンマンは子供にパンをあげても、「君、いまお礼言わなかったね」とか、そういうことは言わないわけです。

一方で、私たちは見返りを求めてしまう存在ですよ。ね。「あれだけのことをしてあげたのに、お礼言わなかったな」とかね。本当に小さい存在だなと思わされます。

アンパンマンが長年にわたってヒーローであり続けるのは、「他者を慈しむ」という普遍性に多くの人が共鳴しているからではないでしょうか。それは、仏教が解く慈悲の精神と通底しているように思います。

今年（二〇二四年）は、浄土真宗が立教開宗されたといわれている元仁元年（一二二四年）から、ちょうど八百年という節目の年です。この八百年という歳月は、親鸞聖人によって明らかにされ

た浄土真宗のみ教えが、悲しみや苦悩を抱える多くの方々の支えになってきた歴史でもあります。生き方や罪を告げず、命の終わり方も問題としない阿弥陀様が、ただ一筋に「われにまかせよ、かならず救う」と、救いを告げてくださっている。そのような阿弥陀様のお慈悲が説かれてきたからこそ、八百年も人々の拠り所となり、支えになってきたのです。

何のために生まれて 何をして生きるのか

生まれてきた意味、そして私の存在の根拠とは一体何なのか。それを親鸞聖人に尋ねてみます。ただこのちかひありときき、南無阿弥陀仏にあひまゐらせたまふこそ、ありがたくめでたく候ふ御果報にては候ふなれ。

（『親鸞聖人御消息』第四通／『浄土真宗聖典―註釈版―』七四三頁）

本日、最初に読み上げたご讃題です。

親鸞聖人は「南無阿弥陀仏」に遇うことこそが「たぐいまれな尊い果報」、つまりこの人生に

おける最も尊い出来事であると仰っています。聖人の九十年の生涯にはさまざまなご苦勞がありました。しかし、聖人は「南無阿弥陀仏に出遇うことができ、尊い人生だった」と、ご自身の人生を振り返っておられます。

そして私もまた、「南無阿弥陀仏」に出遇うことができました。「お願いだからお念仏を称えてこの人生を歩んでほしい、そして命の縁が尽きたならばあなたを必ずお浄土へと生まれさせましょう」という阿弥陀様の願いが、「南無阿弥陀仏」の言葉となって私を包み込んでくださっています。私はただ生まれて、ただ死んでいく人生ではなかった。阿弥陀様の大きな願いに生かされ、お浄土へ生まれて仏のさとりをひらかせていただくのちであったと、お念仏との出遇いを通して生まれてきた意味、そして自分の存在の根拠を確かめていけるような世界が開かれていくのです。

本日は、仏教の視点からアンパンマンを読み解いていく中で、善悪の問題や他者を慈しむ心が、浄土真宗のみ教えと通じる部分があるなど感じたことをお話させていただきました。それでは、時間となりましたので、肝要は拝読の御文章をもって代えさせていただきます。

【文責宗教部】

(二〇二四年五月二十一日 降誕会法要 瀬田学舎)

多様性の中で生きる

鷺尾龍華

(石山寺 座主)



鷺尾 龍華（わしおりゅうげ）

滋賀県大津市石山寺に第五十二世座主の長女として生まれる。

同志社大学文学部美学芸術学科（西洋美術史専攻）卒業。

種智院大学仏教学科卒業。

2018年 石山寺法輪院住職就任。

2021年 石山寺第五十三世座主就任。

東寺真言宗宗議会議員、近畿宗務副支所長、石山観光協会会長などを歴任。

【著作】

『ほとけの誓い、おもき石山 紫式部ゆかりの寺にて』（淡交社 '23年）

皆様、おはようございます。鷲尾龍華と申します。今日は少しの間、皆さんとお話しさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。少し自己紹介をさせていただきます。私は大津市の石山というところ、瀬田川の西岸ですね、そこにある石山寺というところで生まれ育ちました。石山寺は真言宗のお寺です。

こちらの龍谷大学は浄土真宗ですから石山寺とは宗派が違います。しかし、私の母の実家は徳島の浄土真宗のお寺で、小さい時はフェリーに乗ってよく連れて帰ってもらいました。阿弥陀さまがいっしょなところで遊ばせていただいた思い出がございます。また、小学校も京都の浄土真宗の学校に通っておりました。

そして、石山寺の中には蓮如堂というお堂があります。蓮如堂という名前は通称なのですが、蓮如上人のゆかりのものをお祀りしているというところからそう呼ばれております。ここには蓮如上人が六歳の時に着ていたとされる鹿の子の小袖が一部残っています、六才の頃の蓮如上人の御影をお祀りしています。

蓮如上人は小さい時にお母さまとお別れにならなければいけなかったんです。その時にお母さまは鹿の子の小袖だけを持っていかれました。そして、蓮如上人が大きくなって石山寺にお参り

をされた時、その小袖が観音さまの腕にかかっていた、という伝説があります。このことから、蓮如上人のお母さまは石山寺の観音さまの化身だというお話もあります。

そのようなこともあり、私は龍谷大学や浄土真宗に対して親しみを持っています。

一方で、真言宗は平安時代に弘法大師空海さまが唐、中国から持ち帰られた宗教です。真言宗では、生きとし生けるもの、私たちの目に映るすべての存在は大日如来という仏さまの化身であるというような言い方をします。そしてまた、我々が生きているこの身のままで仏に成ることができるという即身成仏を説きます。ですから、浄土真宗とは教義が違っているのですが、元は同じく仏教です。どうぞお話を聞いていただければ幸いです。

石山寺で初めての女性座主

今日は「多様性の中で生きる」というお話をさせていただきます。このテーマをなぜ選んだのかと言いますと、私自身が「多様性とは何ですか？」と問われる機会が非常に多いからなんです。

私は、石山寺で初めての女性座主ということで注目をしています。私自身、兄弟は

いませんでしたし、小さい時からお坊さんに成りたいと思って勉強をしてまいりましたので、自分が座主になってこんなに注目されるとは思っていませんでした。就任してから、女性がこのような立場に就くということがいかに特殊なことであるのかということに気づきました。今日は、そんな中で気づいたことについてお話をさせていただきます。

女性僧侶はどう見られているのか

「自分」であるとか「私」という存在については、いろいろな言い方で語ることができます。例えば、性別、所属、何が趣味なのか、何を人生の目的としているのか、そういうところから私は「私」について語ることができます。また、私が「私」のことを「こういう人間である」と思っている一方で他の人からどのように見られているのかについては、また別の問題があります。

二〇二三年のデータですが、日本の仏教界において僧侶の中で女性僧侶が占めている割合が出ております。浄土真宗では約一五%、浄土宗、日蓮宗、真言宗では約一〇%、禅宗では五%未満です。これを聞いて皆さんはどう思われたでしょうか。「少ない」と感じられた方もいるかもし

れませんし、「意外と多いな」と感じられた方もいらっしゃると思います。

私は種智院大学に通っておりまして。種智院大学は真言宗の大学で、これからお坊さんに成るという人が沢山いらっしゃるって、その中に女性が結構多くいました。学生の時にいろんな修行をして、僧籍を取られた方も沢山おられたので、私はこのデータを見て「意外と少ないな」と思いました。

実際、卒業して社会に出てみると、女性僧侶が住職に成っているというパターンはあまり多くはないということに気がつきました。女性が勉強して僧侶に成っても住職として働いているのは男性僧侶であつたり、夫になる人であつたりするというようなことが結構多いのです。

自分自身は小さい時からお坊さんになりたいと思っていて、男性と同じ勉強をして、同じことを学んで、同じ修行をしてきました。それなのに、自分が座主に成った時にはとても心配されたんです。「心配された」ということがすごく意外でした。私は父が早くに亡くなったので、それで心配をしていたいたということはあったとは思いますが。しかし、私が順当に座主に就任したということに対して不安を覚えている方が非常に多いという事実にとてびっくりしました。そして、少し悲しくなりました。

そういった方のお声を聞いてみると、「女性で、まだ若いので心配をしています」ということを言ってくださいます。それは一つの厚意でもあったと思うんですけども、私自身にとっては悲しいことでもありました。

自分が何者であるかは自分で決める

今は多様性の時代ですから、性別や年齢に関係なく、誰がどういった職に就いても良いわけです。しかし、周りからの目はいつでもついてきます。そして、「大丈夫かな？」と思われたり「なんであんな職に？」と思われたりすることがあります。そんな中で、私自身は「自分が何者であるかは自分で決めた方が良い」と思っています。

たとえの話をしします。年長者のお坊さんは非常に尊ばれます。お坊さんは六〇代でもまだ若くて七〇代、八〇代ぐらいになるとようやく「ありがたい」と言われます。そういった年長者の人は私を見てどう思っているのでしょうか。「頑張っている」と思ってくださいる方もおられますが、私には挨拶をしてくれないような方もおられます。お孫さんがおられる方の中には、私を孫のよ

うに見てくださる方もいます。

多くの人は属性でその人を見ています。私自身もまたそうです。私が幼かった頃は祖父が座主をしておりましたので、「おじいさん」という属性の人がすごく好きで、年長の人を見ると「素晴らしいな」とすぐに思ってしまうがちです。父親との関係が良くなかった人は「年上の男性」という属性の人に対して「苦手だ」と思ったりするでしょうし、母親との関係によって、お母さんみたいな人を「すごく好きだ」と思ったり、反対に「近づきたくない」「苦手だ」と思う人もいます。

「おじいさん」「年上の男性」「年上の女性」というのは、その人自身を見ているというより、その人の属性を見ているんです。しかも、その見方は無意識的に判断して見ているという部分が大きいのではないかなと思います。そうやって、自分の「ものの見方」をお互いに投影し合って生きているのがこの世界なのではないかと思っています。

そんな中で生きていくのだから、私は「自分が何者であるかは自分で決めた方が良い」と思っています。それが私の一つの結論です。

人それぞれに違う視点がある

また、一人の人を通して、人によって見方が違います。

例えば、電車の中で小さなお子さんが泣いているとします。お母さんはなだめていますが、お子さんはなかなか泣きやみません。それを見て皆さんはどのように感じるでしょうか。ちよつと考えてみてください。

「かわいそうだな」「お母さんが大変だな」と思う人もいますし、「子どもがうるさいな」と思う人もいます。もしかしたら、「自分も何かしてあげたい」と思う人もいるかもしれません。どれかが正解ということではなく、一人の人を通して、感じ方は人それぞれに違っているということです。そして、それは自分自身の生い立ちに非常によく関係していると言えると思います。

私の経験の一つお話ししたいと思います。私の家は京都にお墓がありまして、お盆にはいつも母と一緒に参りをしています。二年前、座主に就任してから初めてのお盆にお墓参りに行きました。その帰りにお昼ご飯を食べて帰ろうということになり、お店に入りカウンターに座りまし

た。そこで何を注文しようかと母と話していると、ちょうど隣に座っていたご家族がこんなお話をされました。

「大津の石山寺ってあるやん。」

その時点で「自分のことや……」と思ってビクツとします。

「あそこってお父さんが亡くなってお嬢さんが継いだらしい。」

「大変やなー。」

というお話でした。

とりあえずは悪口じゃなかったのでホッとしたんですけども、その時に初めて、お父さんが早くに亡くなって娘が大きなお寺を継がないといけなくなったというのは、確かに客観的に見ると大変なことだと気がつきました。私自身もその話を聴いて「それは大変だ」と一瞬思ったのですが、でも、「大変だ」と言われた私が実際にどう思っていたのかというと、少なくともその時には大変だという自覚はありませんでした。本人が感じていることと、周りからどのように見られているかということは全然違うんだな、ということについて面白く感じました。

自分を投影し合って生きている

これは私が臨床宗教師の研修のために病院に行っていた時、その患者さんとしたお話です。

お医者さんに付いて患者さんのお話を聞かせていただき、求められた時にだけ宗教的な話をします。

私が行った病室では、五〇代ぐらいの男性が寝ておられました。その方は若い時に事故に遭い、体が動かなくなっていました、言葉を発することができなくなった方でした。

看護師さんはいつも通りその方に話しかけていらっしゃるんです。その患者さんは看護師さんと話しをされる時にはにっこりとされるんですね。リラックスされているなっていう感じがすごくしました。ただ一方で、看護師さんが何かを取りに行く間、私が一人でその人に話しかけていると少し不安そうな顔をされました。やっぱりいつもお話しされている方じゃないから少し緊張されるんだろかなということを感じたんですけれども、私自身がそれ以上にその方と関わる事に辛さを感じていました。

研修中に、病院でどんな経験があったかということを語り合う場というのがありました。私は

そこでその患者さんの話をさせていただきました。そうすると先生は「なぜ辛い気持ちになったのか」と私に問いかけました。私は少し考えて「その人が可哀想で」と答えました。そうするとその先生は「本当にその人は可哀想なのか」と仰いました。少し考えてみて、客観的な事実として、若い頃に事故に遭われて体が動かなくなってお話もできなくなったということだけを見ると、確かに可哀想だと思います。でも、彼は病室で看護師さんや先生とコミュニケーションをとってニッコリと笑われる。先生は「その人が可哀想かどうかというのは、どのようにしてわかるのか」と仰いました。そして、「どれだけその人はかわいそうでしたか」とも仰いました。「可哀想である」というのは私の一つの決めつけであつたということをその時感じて、非常に反省をしました。「可哀想」と思う感情は、とても慈しみ深いように見えますが、それによって人を傷つけてしまうということもあるのかもしれない。

そして、その「可哀想」という感情はどこから来たのかということを考えてみて、私は自分を相手に鏡のように投影していたのだということが分かりました。正直なところ「自分がもしそのような目に遭ったら嫌だな」と思っているところがありました。自分がこうなったら嫌だという姿や、あるいは自分にはこんなところがあるけれど、それは隠しておきたいという姿を人が見せ

てくれた時、自分の心はすぐ不安になるんです。

私たちは、人に対して自分の一部を鏡のように投影し、写し合って生きているということが言えると思います。

一つの見方にとらわれてしまう



この図を見たことがあるでしょうか。有名な図なのでご存知かなと思います。何の図に見えますか。黒いところに注目すると壺の絵に見えます。白いところに注目すると人の横顔に見えます。一つの絵から二つのものが見えます。一つのものだと思って見ている時はその反対側のことには気がつきません。これはルビンの壺という良く使われる絵です。

もう一つ見てみましょう。これもご存知かと思えます。



おばあさんの顔、頭巾というかスカーフのようなものを被っていて、お鼻が大きくて顎が少し出ているおばあさんの顔に見える側面と、もう一つは向こうを向いた若い女性の顔にも見ることが出来ます。

もう一ついきましよう。これはウサギなのか鴨なのかという絵です。

このように、一つのものに対して私たちは瞬時に「こうだ!」という解釈をしてしまいます。しかし、答えは実は一つではなく、一つだと思っている時にはもう一つものが見えなくなりがちだということを知っておくと良いのかなと思います。

こういう歌があります。

手を打てば 鯉は餌と聞き 鳥は逃げ 女中は茶と聞く 猿沢の池

手を打ったその音を聞いて、池の鯉は餌がもらえんと思つて寄つてくる。鳥はびっくりして逃げていく。女中さん、とは今は言わないのかもしれないかもしれませんが、お店に入った時にお茶を持ってくる方と同じパンという音を聞いて「あ、お茶を持って来いってことだな」と判断してお茶を運んでくる。同じ音ですが、人によって受け取り方がいろいろ違うということです。

最後の猿沢の池は奈良の興福寺のそばの大きな池です。なぜ突然この池が出てくるのかと言うと、興福寺は法相宗の本山でいらっしゃいます。その法相宗で説く教えが唯識というものなんです。唯識という学派では、この世界、自分が見ているもの、聞こえてくるもの、そして感じていること、そういうものは全部自分の心が作り出しているというのだという教えを説かれます。ですから、最期に「猿沢の池」という言葉が入ることで、これは唯識についての歌だということがわかるわけです。

手を叩くという一つのことについて、いろいろな受け取り方をする生き物があります。鯉と鳥と人間ですね。それぞれに違います。これは違う種類の生き物について言っていますけれども、人間

一人ひとりを取ってみても、一つの出来事に対してどのように思うのかということは、本当に人それぞれであるということです。

自分一人の中にたくさんの自分がいる

自分の中にはいろんな見方、価値観があり、また他人を通して自分の価値観の答え合わせをしている、という風にも言うことができます。

ですから、自分と同じような価値観を持った人と仲良くなることが多いのです。価値観が似ていると楽です。もちろん相手が自分の価値観と全く同じというわけではありませんので、その人と上手くいかないことも出てくると思います。自分の中での葛藤のようなものが起こることもあります。

平野啓一郎さんが書かれた、『私とは何か「個人」から「分人」へ』という本があります。私という存在は「個人」と言い換えることができますけれども、平野さんのお考えによると、一人

の人間の中にはたくさんの人が住んでおり、分けることができるのです。それが「分人」です。平野さんは、本当の自分一つではないとおっしゃっています。

たとえば、皆さんもAさんという時の自分とBさんという時の自分というのが全く違う個人であるように感じるということがあると思います。また、Cという集団に所属している時の自分と、先程のA、Bの自分というのも全く違うように感じるというようなことがあると思います。これは皆に起こることです。

こういう状況で、Aさんとケンカをしてしまうとすごく悲しいわけですが、それはAさんと一緒にいられない自分が出てきたからと言うことができます。Bさんと死別してしまったとすると、Bさんがいなくなつて悲しいのですが、言い替えると、Bさんと一緒にいられなくなつた自分が出てきて悲しいとも言えます。

Aさんとケンカをしてしまった時、Cという集団に自分が所属している自分のことを知っておけば、Cという集団でまた何か違う価値観を見いだして、Aさんのところに戻ってくることもできます。こういう「分人」をいくつか持つておくのと良いのではないかなと思っております。

仏さまの見方を曼荼羅に聞く

真言宗で大変大事にしている曼荼羅という図像がご紹介します。金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅という二種類の曼荼羅が並べられているのですが、この二つは二つで一つであることから、「分けることができない鳥の両翼」や「車の両輪」のようなものだと言われます。二つで仏の悟りの世界を表しています。

金剛界曼荼羅では図が縦と横に三つずつ、九マスの形に分けられていて、それぞれに仏の悟りに至る修行の過程が描かれています。「の」の字を書くような順番で修行が進んでいきます。良く見るとたくさんの仏様が描かれていて、様々な動きをしています。

胎藏界曼荼羅は、真ん中にいらっしゃるのが大日如来という仏さまです。この大日如来の周りには八人の仏さまが描かれていて、そこが赤い花の形になっています。大日如来を中心として同心円状に広がっていくように描かれています。これは仏さまの心を開いて見せてくださっているという状態です。この胎藏界曼荼羅をよく見ると、実は端っこには餓鬼とか、猛獣、動物、修羅のような恐ろしい姿が描かれています。それも含めて心であると説かれます。

真言宗では、仏の悟りの世界の中にもそういった恐ろしいものが存在して、この仏の悟りの世界は人間の心の本質であると言います。こういう恐ろしい心、悲しい心が自分の中にあるのだと認識することが非常に大切なことです。

そして、その心を持って金剛界曼荼羅に描かれている修行の過程に入っていきます。曼荼羅には仏さまがたくさん描かれています。この仏さま方が何をしているのかと言うと、与え合っているんです。

実はこちらの金剛界曼荼羅でも、真ん中は大日如来です。金剛界大日と胎藏大日という風呼び名が違って、意味も少し違うんですけれども、同じ大日如来なんです。違いとしては、心の在り方を見せているということと、修行の過程を見せて悟りへと至らせているというような状態の違いがあります。

金剛界曼荼羅では真ん中から段々とその世界が展開していくというような動きが見えます。大日如来が自分の働きを四つに分けて、その四つに分かれた仏さまが、出生したお札にいろいろなものを出して与え合っている。お互いに影響を与え合っている姿が映されています。

これをこのまま見ると、「何のことだろう？」と思うでしょうが、これは人間の性質を表して

います。本当は、人間はそういった与え合う心を持っている。お互いに与え合う姿で仏さまを目指していこう。そして、この曼荼羅を見ながら、描かれているように修行をしていこうということです。

これは今のように多様性が注目される社会には、非常に重要なことなのではないかなと思って
います。

多様性という言葉はすごく難しい言葉です。どれだけ頑張っても、男女、年齢、属性などは存在します。逆にそういった属性そのものがなくなってしまったとしたら、秩序が乱れていくのではないかなと思います。しかし、その属性の中で、そこに所属していることが苦しいと感じている人がたくさん居ます。そんな中で、どのように生きていくのか。自分の中にも多様性があり、そして他人の中にも多様性があると思えたなら、すごく楽になり、生きていく一つの糧になるのではないかなと思っています。真言宗と浄土真宗とは宗派が違いますけれども、この曼荼羅に描かれていることを皆さんに知っていただければ嬉しいなと思います。

その人自身を見つめる

パラパラとお話をしてきましたけれども、人は他人を通して自分自身、あるいは自分の価値観を見ているということをお話いたしました。そのような見方によって勘違いをしてしまったり、相手を何かの枠に当てはめてしまったりすることが大いにあると思います。もし、それによって苦しくなるようなことが起こったなら、「その人自身を見つめる」ということを心がけると良いのではないかと思います。その人自身を見つめるというのは、その人がどこに所属している人であるかとか、性別が何であるかとか、どのような役職についているのかとか、そういったことを超えて、その人自身が何を思っているのか、何を感じているのかということを問いかけてみるということです。

そして、自分自身についても、その人と共にあるということを経なければいけないと思います。自分のことを分かってもらえないと思ってしまいうこともありますが、自分のことを分かってもらう努力をする必要はあると思います。自分はこの人間で、こういうことが好きで、こういうことが得意で、こういうことはあまり好きではありません、こういうことを言われると傷

つきます、というようなことをちゃんと話し合うことによって解決していくことがあると思っています。

それでは、今日の私のお話はここまでとさせていただきます。

龍谷大学って本当に良い大学ですね。広々としていて、自然に囲まれている。同じ大津市内なので、こちらに來られてすごく嬉しかったです。

実は昔、ここにTOEICを受けに來たことがあります。良い点数ではなかったですけども、いい思い出として残っています。

今日はいろいろな方がお話を聞きに來てくださったと思います。コロナ禍も落ち着き、これからの学生生活ではたくさんの方に会えると思います。自分の中の多様性を築いていって、そこからどんどんと広げていっていただけたら嬉しいなと思います。今日はどうもありがとうございます。

まずは、本書の刊行にあたり、快くご協力いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

仏教は、苦しみにこそ焦点を当てる宗教であると言われます。現代の様々な問題に対して、仏教徒がどのように向き合うべきなのか、先生方の深い考察の一端をお伺いできたように感じております。

この冊子が、読者の皆さまにとって、誰かの苦しみに目を向け、「今ここ」の苦に寄り添おうとするきっかけとなれば、これ以上の喜びはございません。

最後に、今年二月にご往生されました龍谷大学教授杉岡孝紀先生の学恩を偲び、宗教部一同、謹んで哀悼の意を表します。

(宗教部)

今ここの苦によりそう

「りゅうこくブックス」 No. 138

二〇二四年十月十八日 発行

編輯
発行 龍谷大学宗教部

〒⁶¹²⁻⁸⁵⁷⁷京都市伏見区深草塚本町67

コロナ禍の中で	福間義朝
ブッダは人工妊娠中絶を責めるか	大谷由香
杉岡先生を偲ぶ	高田文英
中学生・高校生と仏教を学ぶ中で教えられたこと ～私の立脚地は何処か・共に苦悩し、問う～	近藤義行
仏教から結婚式の意味を問い直す ～結婚式はもっと自由でいい～	田坂亜紀子
仏教から読み解くアンパンマン ～浄土真宗の視点を中心に～	四夷法顕
多様性の中で生きる	鷲尾龍華

